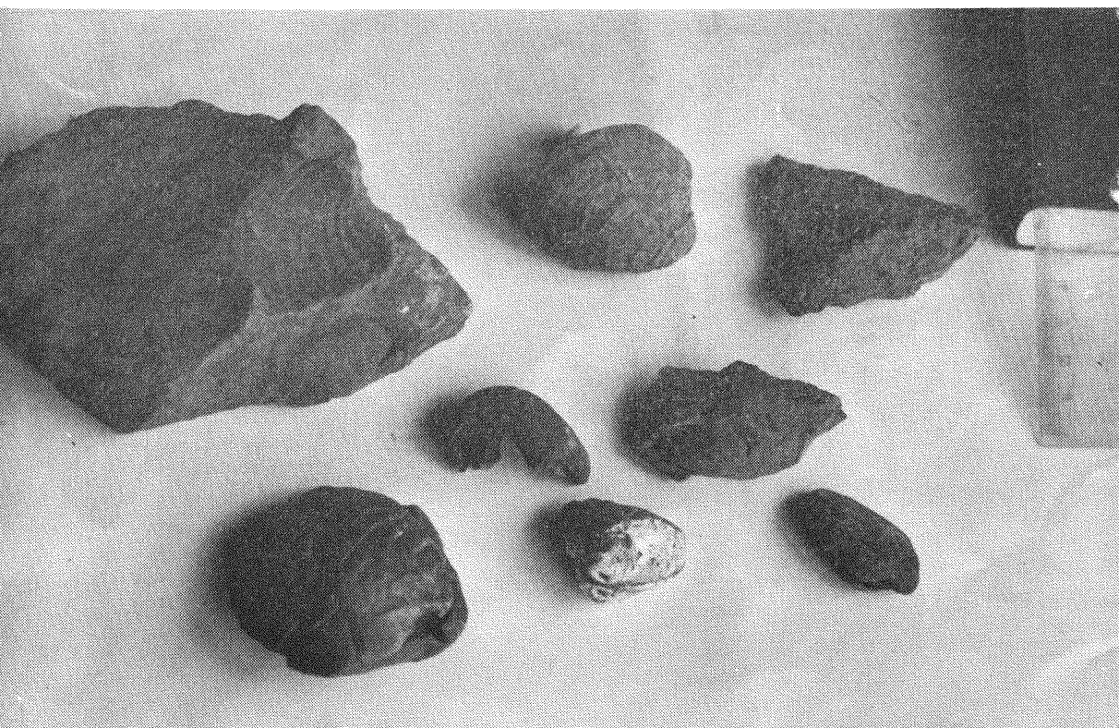


第一編 地

誌

手打沢温泉付近の化石



第一章 地 質

第一節 位置・面積

本町は、南巨摩郡の中ほどに位置し、富士川をはさんで、東は、下部町および六郷町に接し、西は標高一六三九・五呎の富士見山の山嶺を境として、早川町および鰍沢町の一部に、北は鰍沢町に接し、南は早川を境として身延町に接している。

標高は、本町役場所在地切石で二二六呎、鰍沢町に接する蟹谷沢二三七呎、飯富二二〇呎で、北と南との標高差は一七呎である。

位置は、東経一三八度二二分四七秒から一三八度二八分四秒との間、北緯三五度二四分三三秒から三五度二九分四八秒との間に位置し、本町役場所在地は、東経一三八度二六分二〇秒、北緯三五度二六分四八秒である。

面積は四二・九一平方キロメーターで、長さは東西は七・八キロメーター、南北は最も長い所で七・五キロメーターである。

第二節 地 形

中富町の地形は、富士川をはさんで、東部山地（醍醐山・下田原山）、西部山地（富士見山）と、富士川に注ぐ、西から東に流れる手打沢川・寺沢川・夜子沢川・曙川の流域に発達した河岸段丘と、この段丘の両側に分水嶺をなす、通称西島山・手打沢山・寺沢山・夜子沢山・烏森山につづく曙地区の富士見山麓につらなる山林・畑を形成する地域と、富士川の流域に発達する河岸段丘上の平地（西島・切石・八日市場・飯富・下田原・宮木など）の四つの地形から成り立っている。

一 富士見山

富士見山は標高一六三九・五呎で、山嶺は通称、堂平嶺（一四二五呎）から北に、一つは萩嶺（二の平・一の平）・山王嶺を経て大柳川に続き、一つは御殿山（一六六九呎）十谷峠・足馴峠・源氏山（一八二六呎）・櫛形山（二〇五一・七呎）に続き、一方、南には

矢細工嶺（一五五五呎）から福原嶺（二二〇〇呎）を経て、^{くつぽ}樽坪嶺（六三三・八呎）に続き早川に没している。

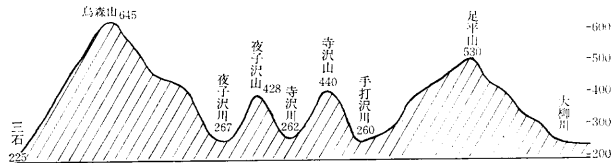
富士見山麓の荻・堂平・平須・矢細工・福原を結ぶ地点は、富士見山断層崖が露出し、その特徴をよくあらわしている。また、この地点は同質のローム層（赤土）があり、原始人の土器・石器が荻・堂平・平須、矢細工の富士見山麓一帯の部落より出土している。

二 河岸段丘上に発達する中間地域

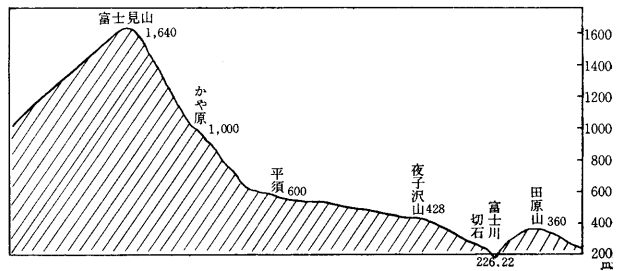
南北に走る富士見山にはほぼ直角の方向で、荻から大塩山・足平・西島へと続く山塊と、荻から久成山・寺沢山・切石へと続く山塊、平須から石畑山・夜子沢山・切石へと続く山塊、それからもう一つは、矢細工・間遠峠・大子山・鳥森山へと続く山塊とがなだらかな丘陵地をなして、それぞれの山塊は富士川岸で絶壁となつて富士川に落ちこんでいる。この山塊は北から大柳川・手打沢川・夜子沢川・曙川・江尻窪川で分割されている。これらの山塊の間にある平地は、すべて各河川沿いに形成された河岸段丘であり、本町における水田の大部分は、この河岸段丘上に発達したものである。寺沢川と石畑川の合流点における河岸段丘の断面は次の図のようになっている。

三 富士川の河岸段丘

富士川岸には、西島・手打沢・切石・下田原・八日市場・宮木・



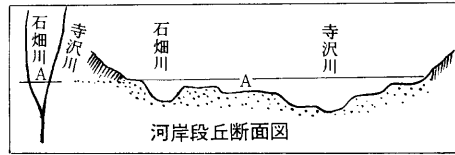
南北断面図



東西断面図

小田原・早川合流点と、いたるところに平地がある。これは、富士川の河岸段丘による平地で、往時の富士川の流れは現在の川底からみると二五—三〇呎の段差があり、昔日の流れの跡がはっきりと残されているのは、甲南中学校の対岸にある河岸段丘である。また、西島の岩崎・切石の御崎（御崎神社）等の地名は、当時の河岸と関係ある地名と考えられ、富士川が現在より高い地点を流れていたこ



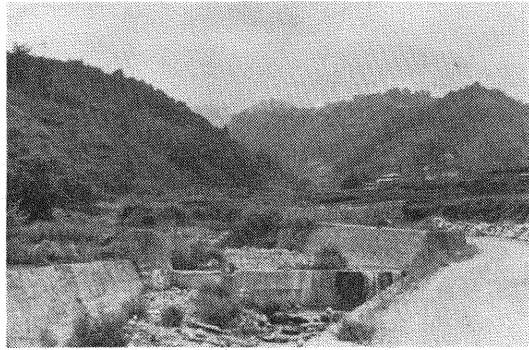


下掲写真地点の河岸段丘断面図

との証左となるものである。

代表的な河岸段丘とされている西島（揚檜―西島小学校―富士川）地区の断面（図は次ページ）を示してみると次のようである。

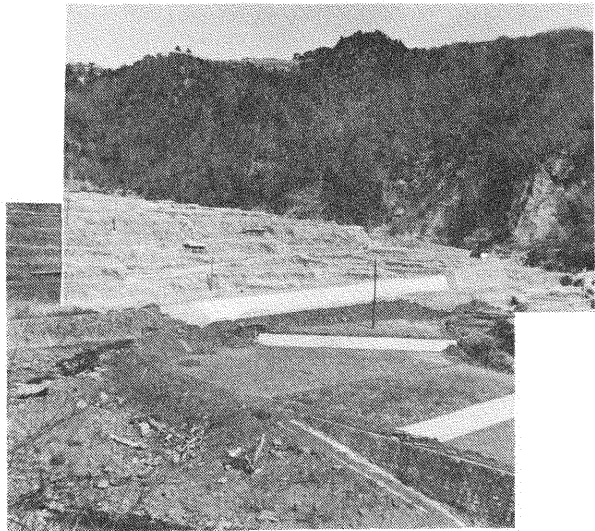
西島の河岸段丘は、揚檜を境にして、昔は鴨狩・津向・岩間平まで一望の河原であったことは、水害の時に一面に泥水でおおわれるのをもてわかる。現在のように河床が下がったのは水害のたび土砂の堆積がおこなわれ、河床の浸蝕による破碎作用によるものである。また、西島の平地は現在の国道五二号線を境に河原町から南に



寺沢と石畑川合流点

かけて水田より、三十四畧の高さに新しい段丘がみられる。これは、昭和川、初沢川の土砂流出による堆積（小扇状地）によって形成されたものである。

河岸段丘の上に新しく形成された小扇状地は、八日市場の段丘平地にも見られ、これは大子山川、中沢川の流出土砂によるものである。こうした谷川の特徴として天井川を形成するのが一般的であっ

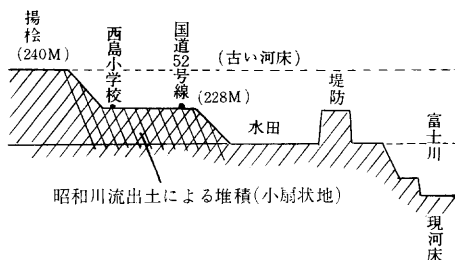


曙川の河岸段丘

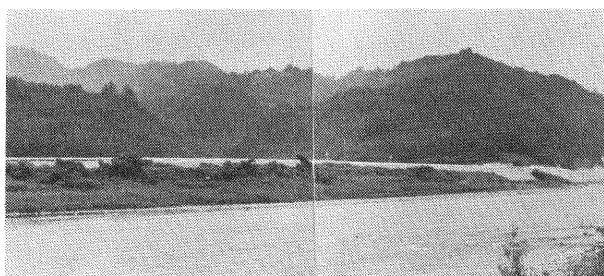
て、西島の昭和川、八日市場の中沢川もその典型的なものである。

四 東部山地と河岸段丘

富士川の東岸の山塊は南から醍醐山（六三四・八畝）、中坂峠、田原山（三九四畝）、城山（四五八畝）と続いて岩間平に落ちこん



揚桧—西島小学校—富士川断面図
西島の河岸段丘図



八日市場の段丘

でいる。

その山塊の間に宮木・下田原の河岸段丘が発達している。宮木・小田原・大谷津を結ぶ（尾羽根^{おばね}）二七〇畝の丘陵山塊は中位段丘層（比高四〇—六〇畝）といわれるもので、下層部は西八代層、上層部はローム層によっておおわれている珍しい丘陵地形である。

以上のように本町の地形は、富士見山と、そのすそ野につづく、いくつかの河川によって区切られた山塊と、富士川の流域に発達する河岸段丘、東部山地とによって形成されている複雑な地形である。

第三節 地 質

一 中富町地質分布の概況

中富町の地質は、新第三紀に属する複雑な構造をもっている。富士川を境にして、東は御坂層群（河口湖累層・小沼累層・高萩累層・西八代累層・桃ノ木累層・櫛形山累層）と、西には富士見山全体を構成する櫛形累層がたつらなり、両地層群にはさまれて、富士川層群（曙累層Ⅱ曙礫岩層・烏森山累層・下部累層）が南北に走り、それぞれの地層は断層ないしは被覆によって接し、特に富士見山逆断層は規模も大きく昔から研究されている。富士川層群には化石が多く発見され、地史研究の対象として貴重な存在となっている。

る。

二 中富町をとりまく地質

中富町を概観すると、まず西境の富士見山を構成する櫛形山累層が、早川町の塩の上・大久保あたりで、糸魚川―静岡地溝線に断層によって接している。糸魚川―静岡地溝線というのは、明治二〇（一八八七）年にドイツ人のナウマン氏によって、大地溝帯（フォッサ・マグナ）と命名されたものである。日本列島の地質構造を西日本と東日本に区分する構造線（糸魚川―静岡）で、新潟県糸魚川町にはじまって姫川の谷に沿って南下し、大町、松本盆地西縁、塩尻町、諏訪盆地、韮崎市、甲府盆地の西縁、早川、角瀬、春木川沿いに南下し、大城川を大城―古谷城間において横断し、相又川の上流、南部町の戸栗川上流を通過して静岡市におよぶ構造線である。フォッサ・マグナというのは「大きな凹地」のことである。

この構造線の西側は、いわゆる日本アルプスの山岳、すなわち北アルプス（飛弾山脈）、中央アルプス（木曾山脈）、南アルプス（赤石山脈）で、二〇〇〇呎―三〇〇〇呎の峻嶒が連なっている。

大地溝帯の東縁は関東山地である。中富町はこの凹地帯にできた新しい地質年代、つまり新第三紀―中新世・鮮新世（およそ三千万年前）に属している。凹地帯ができたときには、この地帯は海水が浸入していた。その後、この凹地帯の海底に造山運動がくりかえされ陸地がつくられた。それが本町の西側に連なる富士見山・源氏山・櫛形山・甘利山であり、東側の毛無山に連なる御坂山地であ

る。これらの山地のつくられた後、さらに地殻変動による隆起、沈降、浸蝕、堆積、褶曲や火山活動による火成岩の選入、火山による噴出をくりかえしつくられたのが富士川層群（礫累層・烏森山累層・下部累層）や御坂層群（河口累層・小沼累層・高荻累層・西八代累層など）と呼ばれる地質である。

三 各地層の詳説

（一）御坂層群

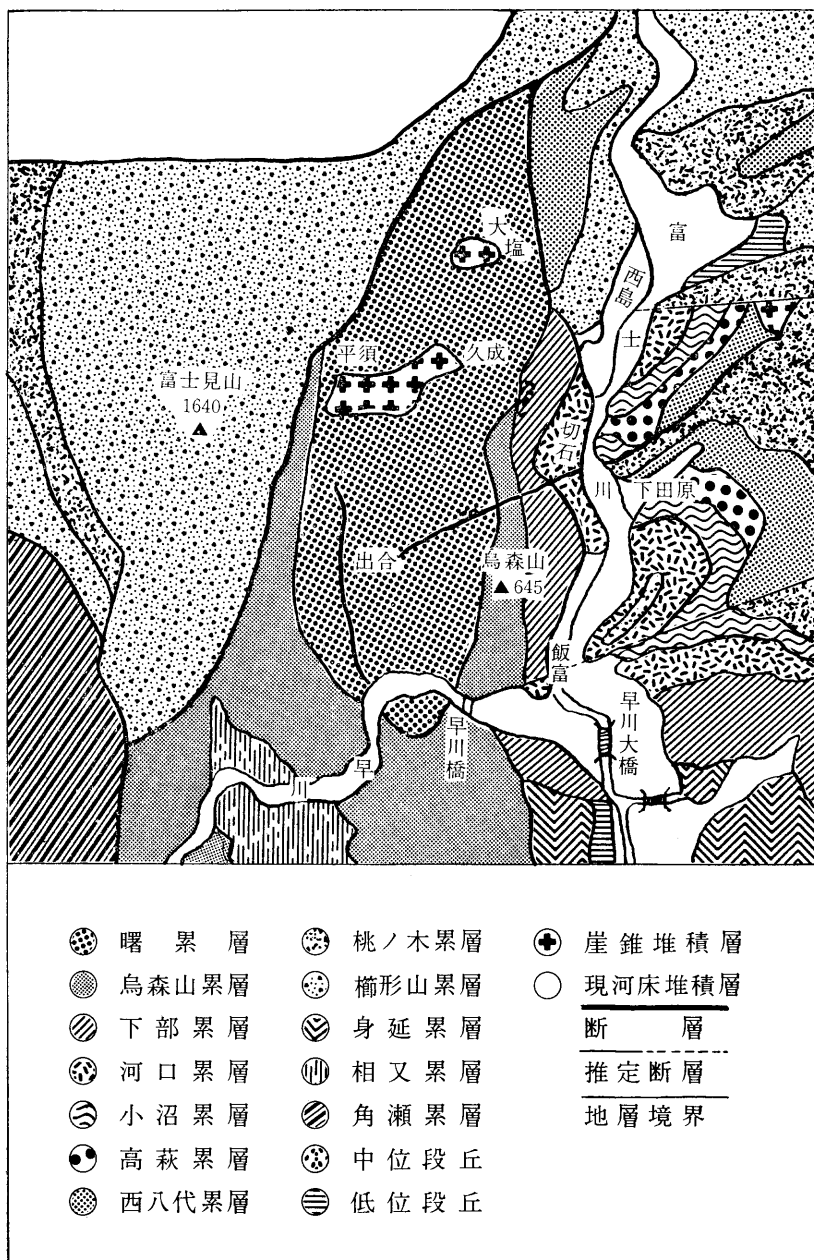
ア、櫛形山累層

富士見山を構成する櫛形山累層は、櫛形山（二〇五一呎）を中心に甘利山から荒倉山に延び、一方御殿山・富士見山・身延山・鷹取山・さらに南部町の篠井山にまで続いている。

櫛形山累層は、火山活動が活発におこなわれたものと考えられ、安山岩・玄武岩・集塊岩・凝灰岩を主とする岩石で構成されている。

富士見山においては、塩の上、福原・古長谷・矢細工、平須・堂平を結ぶ線は烏森山累層に、それより北、荻・山王・鳥屋を結ぶ線は礫岩層に断層によって接している。古長谷地区の露頭の岩相は輝石安山岩・輝石玄武岩などの火山角礫岩・凝灰角礫岩からなる。

これらの岩石は、灰色ないし青灰色で、硬質・塊状である。層理は不明確で、角礫岩の礫としては、〇・一―〇・五呎大の普通輝石、〇・二―〇・五呎大の斜長石などの班晶を含んだ玄武岩、および安山



中 富 町 地 質 図

岩であるが、ときには、角閃石普通輝石安山岩もふくまれている。この岩石は一般的に硬いので石垣、白などに利用されている。

また、本町における楡形山累層は、蟹谷・月見橋、西島一帯・足の平の丘陵台地、手打沢の日向と日陰に渡る橋の所には一部が露頭しており、手打沢・西島境のお天神のある富士川岸の岩石もそうである。富士川東岸では、下田原の旧共和小学校付近から下田原の上向・上田原方面に分布している。

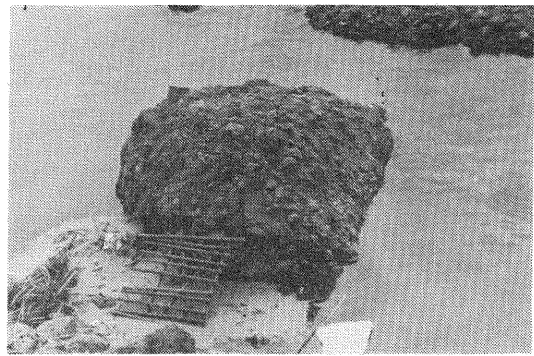
国道に沿う三本標から月見橋トンネルにかけては、凝灰角礫岩、玄武岩、粗粒玄武岩、青または白色の凝灰岩、灰黒色の泥質砂岩の互層になっている。(現在セメントティングされていて互層の状態は見るができない。)

岩崎神社から西島の裏山は、凝灰角礫岩のかけが連続し、主として礫岩、石玄武岩質の岩相である。また、緑色凝灰岩、白黄色凝灰質砂岩を含む火砕岩、溶岩流および輝石安山岩、玄武岩などで構成されている。

足の平の丘陵台地は、石英安山岩、黒色安山岩、緑色凝灰岩、枕状溶岩、凝灰角礫岩を含む凝灰質砂岩、および頁岩で構成されている。西島地域の楡形山累層には、沸石を含むテッセン岩と呼ばれるものや、方解石の結晶したものが産出する。また、西島と手打沢の境の国道五二号線カーブ天神のところの石垣上には、玄武岩の柱状節理が見られる。

イ、桃ノ木累層

これは、中巨摩郡芦安村桃ノ木鉱泉の地層に名づけられたもので、本町では、富士川橋付近から東に分布し、泥岩が主体で暗褐色



西島天神森の集塊岩

の凝灰質頁岩・砂岩の薄層が介在することもある。

ウ、河口湖累層

Ⅱ 屏風岩

この地層は、手打沢から南の方へ、白山権現の切り、切石の御崎神社、国道五二号線の日下りの切り(現在はセメントティングされている)から対岸の大谷津、宮木、屏風岩、醍醐山、下部町雨河内の方にまで分布している。岩相の変化は著しいが、層理は明瞭であり、色は暗灰色、紫灰色で硬質である。

屏風岩は、石英安山岩質凝灰岩である。

そのほかの地点(権現山・日下り)も層理が明瞭であり、砂質凝灰岩と泥岩の互層するところもある。色は全般に淡黄褐色もしくは褐色である。

エ、小沼累層

この地層は、久那土駅西方より、切石の対岸(し尿処理場)、下田原深町、清水、出口、岩下方面に分布している。岩相は、普通輝

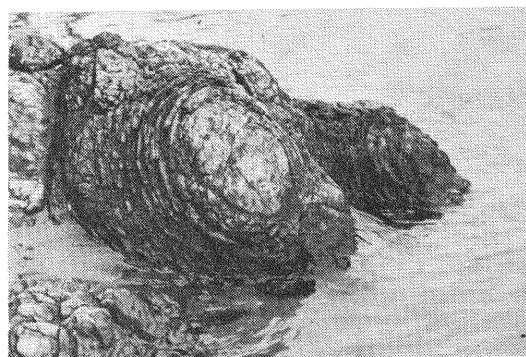
石安山岩質ないしは玄武岩質の凝灰質砂岩を主とし、これに凝灰質泥岩が挟在する。砂岩は露出面で黒色ないし暗灰色であり、玉葱状の風化を示す。玉葱状の露出が多く見られるのは、し尿処理場へ行く途中の切割道路や、処理場下の富士川岸である。

才、高 萩 累 層

この地層は、一色より中坂峠（下部町と中富町の境）・深町を経て雁埦^{がね}の対岸、大石から久那土駅におよんで分布している。この地層は、西八代累層と河口湖累層の間にはさまって接している。



雁木権現山の河口湖累層



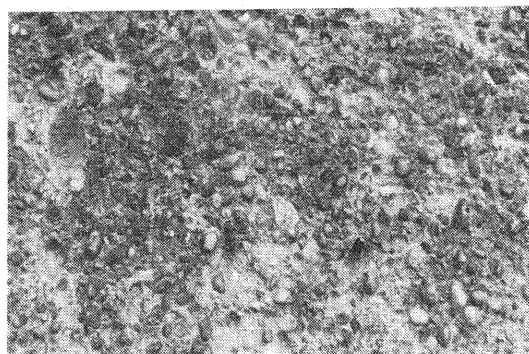
し尿処理場付近の玉葱状の小沼累層

岩相は、玄武岩質の火山角礫岩・凝灰角礫岩からなり、色は暗灰色ないし黒色で塊状をなしている。

この中の玄武岩礫は径五十センチメートルに達する大きいものもある。

力、西 八 代 累 層

この地層は、大塩の一部と旧共和小学校付近から上田原・和平方面に分布し、普通輝石安山岩質の火砕岩が主体で暗灰色の泥岩を介在する。岩相は凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩であり、色は灰白色、帯青白色である。



手打沢温泉付近の礫砂岩

(二) 富士川層群

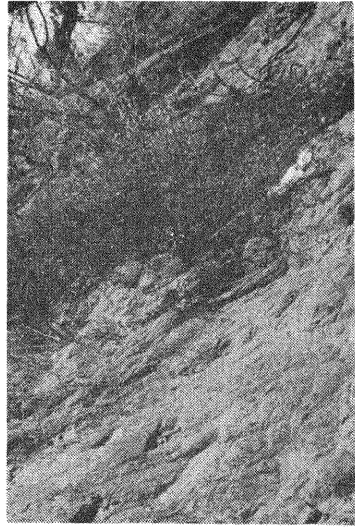
ア、曙累層Ⅱ曙礫岩層

曙礫岩層を概観してみると、早川下流の小原島から北へ、標高四〇〇呎ないし六〇〇呎の地帯に東西二・五^ギから三^ギ呎におよんでいるが手打沢付近で急に狭くなり、大柳川まで南北九・五^ギ呎に分布している。

層の厚さは最大（出合―原―久成間）で三・五^ギ呎ある。

また、西側は荻・山王・大柳川を結ぶ線で櫛形山累層に断層で、東側は西八代、下部、烏森山累層にそれぞれ接している。

この層は、砂岩・頁岩の互層と礫岩によってつくられている。礫は、火砕岩が主で礫の大きさは、二、三^ギ呎から一〇〇^ギ呎に達するものもある。礫の大きさの分布は一樣でないが一般的には北の方



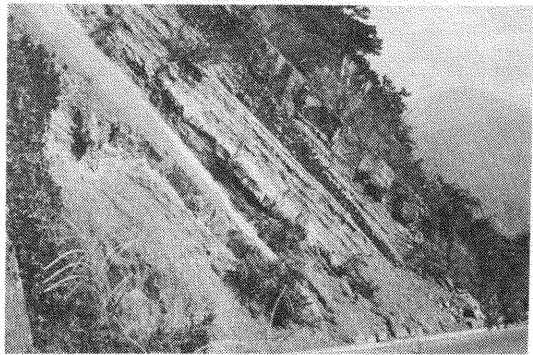
下田原地内旧共和小学校裏の凝灰岩

が大きく、南の方が小さい。山王付近の礫は特に大きいものがある。

礫質は、巨摩山地（櫛形山累層）からの石英閃緑岩・角閃安山岩・輝石安山岩・緑色凝灰岩・玢岩が多く、稀には赤石山地（古第三紀）の粘板岩・硬砂岩などもみられる。花崗岩の礫は場所によって含まれる量が違うが、北へ行くにつれて多くなり、礫岩は白色を帯びるようになる。礫質からみて、すでに陸地化していた、赤石山地・巨摩山地の山々をけずって運んできたことを物語っている。

曙礫岩層は、御坂層以後のもので、地質年代は鮮新世ないし洪積世と推定されている。

この層は、固結度も低く軟弱で、浸蝕されやすく崩壊地や崖が多い。この崩壊地はいたるところにあるが、手打沢温泉付近、天白・吉屋隧道付近、平須の細久保（通称牛首）、矢細工、出合などはその状況が著しい。また久成の「城山」は硬い山塊をなしている。



国道沿いの岩相（三ツ石）



早川橋付近の烏森山累層



富山橋付近の下部累層

イ、烏森山累層

この層は、中富町においては礫礫岩層をつつむようにして、東側では寺沢丸山付近、西側では堂平を北限にしてそれぞれ下部累層・楡形山累層に接して南に伸び、東側は栗倉山、杉山、梅平、小田船原、清子方面と、西側は笹走、千須和、春木川と伸び、糸魚川―静岡地溝線と断層によって接し分布している。(地質図参照)

岩相は、紫蘇輝石・普通輝石安山岩質の凝灰角礫岩・火山角礫岩・凝灰岩が主体で泥岩のレンズをはさむこともある。烏森山を構成

するのはこの層である。なおこの層の分布状況をみると、三ツ石の県道沿いに露頭がみられる。安山岩質凝灰角礫岩が主体で、部分的には凝灰岩・泥岩をはさんだりしている。色は黒色を帯び、角礫の大きさは、径四―一〇センチでなかには四〇センチのものもある。この角礫岩と接して青灰色で塊状の泥岩と砂岩とが互層している。風化すると灰色になり細く割れてくずれる。露頭は早川橋付近の県道沿いにみられる。早川橋から遅沢の観音橋にいたる道路沿いに、安山岩質凝灰岩・凝灰角礫岩・火山角礫岩の切割りがみられる。凝灰岩は黒色をおびていて、層理が明瞭である。この層は北にのびて夜子沢、寺沢まで達している。この層の中に石膏を産する。

ウ、下部累層

この層は、本町においては、手打沢川を北限にして東縁は河口累層、西縁は礫礫岩層、烏森山累層に接し、寺沢・夜子沢・大子山・八日市場・伊沼・飯富に分布し、平兵岩で河口累層に断層によって接断されている。身延町下山の北部、新早川大橋付近に塊状にあらわれ、身延山久遠寺、さらに南部町成島・富沢町福士から白鳥山を経て静岡方面に、一方、飯富の対岸醍醐山の南麓から下部温泉・椿草里に、南部町天子ヶ岳を構成し南にのび、南巨摩、西八代郡にまたがって広く分布している。

岩相は、泥岩・砂岩の有律互層で特徴づけら

れる。本町においては主として青灰色の塊状の泥岩からなる。風化すると灰白色を示し、こまかく割れる。砂岩は細粒で褐色である。この層の代表的なものは波木井坂の砂岩と泥岩の互層で国道五二号線の切割りでみることができる。西八代郡では、波高島泥岩層・上ノ平凝灰岩層・醍醐山砂岩泥岩互層・竹ノ島砂岩層など大規模な岩層がみられる。

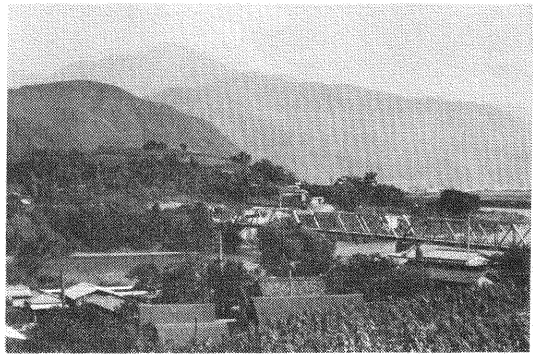
(三) 堆積層 (第四紀)

○現河床堆積層

富士川においてはすべて礫・砂などの堆積物であり、基盤岩の露出する箇所はない、本堆積は大きな支流との合流点に広く、その他の箇所および富士川支流では分布、厚さともに小さい。富士川本流についてみると、岩間付近では、富士川の蛇行と支流の三沢川の流入とによりその幅は一五〇〇呎以上である。早川合流点においては幅一三〇〇呎、延長四き呎で、富士川上流としては最も大規模な河床堆積地である。その他、富士川には波木井川流入部、南部町の戸栗川、富沢町の富士川流入部付近に河床堆積層が発達している。

○洪 積 層

地形の章で述べたように、富士川流域に発達する河岸段丘上の堆積物はすべてこれである。構成物は礫および砂よりなり粘土を表土としており、農耕地や住居地として多くの住民の生活の基盤になっている。西島の部落と水田、手打沢の国道沿い、切石、八日市場、下伊沼、飯富、宮木、小田原、下田原部落などはこの層の上にあ



尾羽根丘陵 (中位段丘)

る。比高は五一四〇呎、地質年代は、第四紀現代に属する。その外、富士川、早川に注ぐ支流の河岸段丘上の堆積物もこのようなものである。低位段丘層ともいわれる。

○中位段丘層

本町の宮木の二七〇呎の尾羽根丘陵や、甲南中学校前のし尿処理場付近から鴨狩・津向部落はこの段丘が発達している。比高は四〇一六〇呎で、地質年代

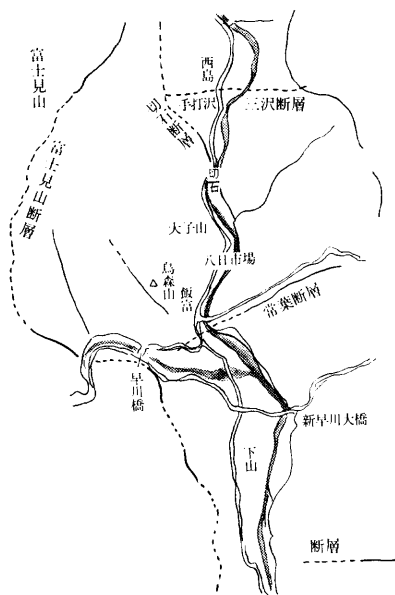
は第四紀後期である。

○高位段丘層

巨摩山地の八〇〇呎級の高所に南北に連続して、旧河床礫層が堆積した平坦地がある。櫛形町の伊奈ヶ湖、鰍沢町の清水・白板・十谷、本町の大塩・久成・平須・原・中山は高位段丘上にあり、地質年代は第四紀中期である。

○崖 錐 堆 積 層

本町では、大塩・久成・平須・矢細工にあり、雑然と堆積した、



中富町の断層

砂・角礫・粘土から構成された堆積層である。

(四) 中富町の断層

○富士見山断層

中富町の断層は図に示すようである。断層というのは、地殻の中に生じた割目を境として両方の地盤が相対的に移動していることである。本町における最も大きなものは富士見山の東麓に沿って南北に走る富士見山断層で地形的にも明瞭に認められる。秋山雅彦（一九五七）は、上大塩の西（萩部落）、早川橋西、身延町下山の大沢、小田船原の四か所で断層面を観察している。

礫礫岩層の西側は楕形山累層と接してその境界面が断層であ

る。富士見山断層は、西側の楕形山累層が東側の礫礫岩層、鳥森山累層の上に西から東へ乗り上げている断層で、このような押し被せている断層を逆断層、または衝上断層（しゅうじょう）という。フォッサ・マグナの西縁にはこのように、古い地層が新しい地層の上へ西から東方へ逆断層で乗り上げた形で発達しているところがあり、この地帯の一つの大きな断層の特徴である。

礫礫岩層は、西に急傾斜（四〇度―七〇度）し、所によつては、直立しているところもある。もともと海底に堆積したものは水平になっているのが普通であるが、傾斜しているのは他から力（褶曲、造山など）が加わって水平のものが傾斜したと考えられる。これは、礫礫岩層が楕形山累層と衝上断層で接しているためであり、礫岩層が擾乱をうけて小断層が著しく発達している。このため岩質の凝固程度も弱く、小断層などにより、いたるところに崩壊地が発達している。

○切石断層

この断層は、白山権現の切割りから、甲南中学校の裏の地すべり付近を通り、中富温泉付近から足の平に延び、桃ノ木累層と礫礫岩層との断層線である。（甲南中学校裏の地すべりはこの断層線ではないかと考えられる）

○常葉断層

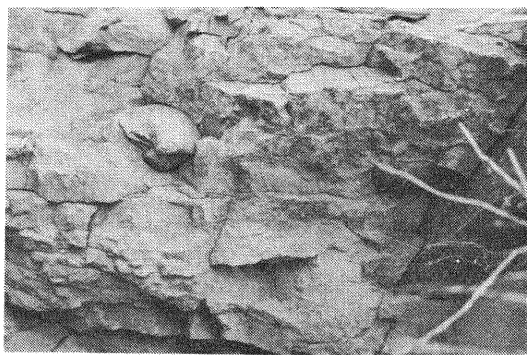
この断層は、下部町加羅田峠（からた）から南南西へ延び、飯富の平（へいべ）まで追跡できる。この断層の近くでは地層が直立し、ところによっては逆転している。この断層は西へ行く程、その落差が大きく、南側が北側に対して相対的に上昇している。

○三沢川断層

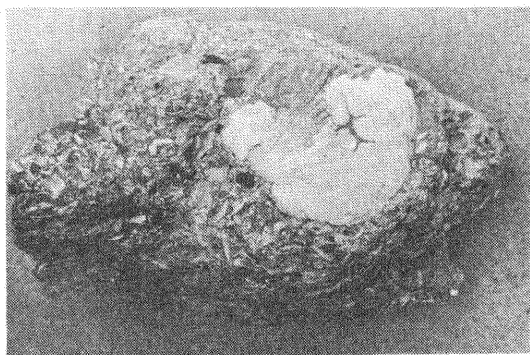
この断層は、三沢川に沿って東西に走り、富士川を横切って手打沢に達するが、その西端は切石断層によって切られている。この断層は露頭では直接観察することができない。

(五) 中富町の化石

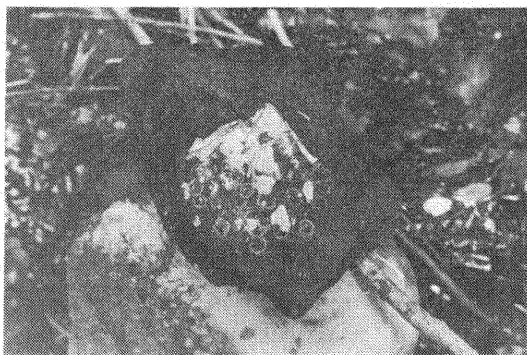
中富町は、前述したように中央地溝帯（フォッサ・マグナ）の中



手打沢温泉入口の化石



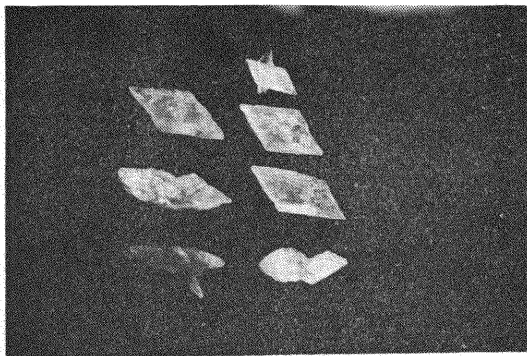
夜子沢（押立沢）の化石



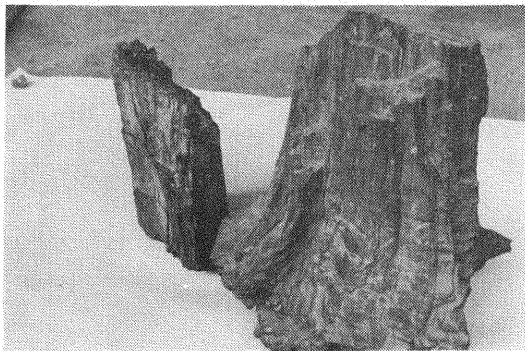
遅沢の化石

に形成された新しい地質年代（新第三紀中新世後期）である。この年代につくられた岩石は堆積岩（岩石の破砕物、火山灰など）である。

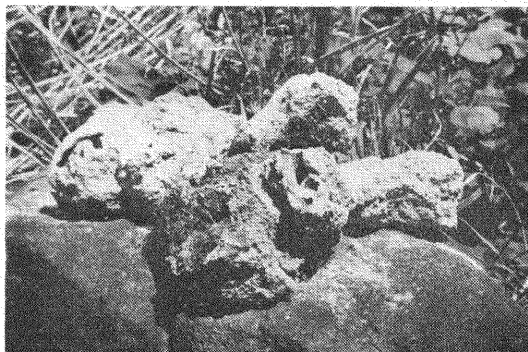
本町を構成する富士川層群や、御坂層群は堆積岩によってできているわけで、本町は地質年代においては陸地になったり、海面下に沈降したりして、長い年代にわたって地殻変動がくりかえされ現代のような状態になってきている。ある時期に陸地であったことは手打沢、大塩の頁岩、砂岩層の中に胚胎する石炭の存在で証明される。



夜子沢の石膏



けい化木（大須成小学校蔵）



遅沢の水石

海面下にあったのは海棲動物の化石がたくさん発見されること
わかる。

化石のことについて甲斐国志に、「貝化石、河内領中山諸村ノ山
溪ニアル者ハ堅キ石ヲ割レハ其内ニ種々ノ貝聚リ化石タル如ク黏
著シテアリ、粟倉山ニ出ツルハ蛤蜊、朗光等ノ化石也。土ヲ掘リ之
ヲ得、其中希ニ魚骨如シ石ナルアリ、亦堅重全ク石ニシテ片面ニ貝
紋ヲ帶ブモノアリ」と記されている。
現在、本町で化石が発見されているのは、手打沢温泉付近、寺沢

の塩枯、夜子沢の押立沢（法向寺裏）、烏森山の西麓の遅沢と身延
町小原島、波木井川などである。これらの化石は、急激な地殻変動
をうけて著しくゆがんでいる。各地域の化石をあげてみると、手打
沢には、イヨスダレ・スダレガイ・ニコウガイ近種・ヒラザクラ
・サギガイ・ユキノアシタ・シラスナガイ・ゲンロクソデガイ・ベ
ッコウソデガイ・ミクリガイ・ホタテガイ・カブラツキガイなどで
ある。夜子沢には、イタヤガイ・カミオニシキガイ・シラスナガイ
・スダレガイなどである。

遅沢には、イタヤガイ・カミオニシキガイ・タマキガイ・ヤスリツノガイ・フミガイ・ザルガイである。

小原島には、イタヤガイ・カミオニシキガイ・タマキガイ・ヤスリツノガイ・ザルボウ・ザルガイ・ギンエビスなどである。

手打沢川の砂岩の中からは、有孔虫の化石が多数発見される。また、押込沢では天狗の爪といわれる鯢の歯が発見されている。

(六) 石膏・石炭・水石

○石 膏

夜子沢赤石神社裏の道路沿いに凝灰岩が粘土化され、青色をおびている中に胚胎する石膏鉱脈がある。小規模ではあるが、長径一丈餘前後のすばらしく美しい石膏である。

この石膏が胚胎するのは、烏森山累層の凝灰角礫岩層であり、石膏は $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ で岩石中の成分が結合し結晶したものと考えられる。

○石 炭

手打沢の康榮閣付近の暗緑色砂岩と頁岩にはさまれて褐炭層が胚胎する。炭質は不良で亜炭に近い。第二次大戦中掘り出されたが現在は廃坑となっている。手打沢から荻にかけて石炭の胚胎がいくつある。ときにけい化木が発見される。

○水 石

甲斐国志に、「蛇骨石、水吸石経ヶ島村ニアリ、一山ノ指出タル鼻ニ水気聚リ滴落ルコト雷ノ如シ、其岩石ノ肌ハ骨朽チタルニ似テ

空多シ、碎取リテ、小木草花ヲ植ウレハ能ク繁茂ス、水気常ニ絶エス苔ヲ生ジ、庭中ノ甃物トスベシ」と記されている。

水石は石灰岩の一種で「水石」と俗称で呼ばれている。本町には、旧遅沢温泉手前の沢の檜林の中と大子山の沢奥に水石が発達している。

第四節 水 系

本町の水系は、富士川がほぼ南北の方向に流れ、早川が東西の方向に流れて飯富・下山間で合流し一〇〇〇餘以上の川幅をつくっている。

富士川には、富士見山を水源とする、手打沢川・寺沢川・夜子沢川の三支流河川が西から東の方向に、また、田原沢川・一色川が東から西の方向に流れて富士川に注いでいる。

早川には、富士見山を水源として、南北の方向に流れる曙川・江尻窪川の二支流河川が注いでいる。水系については、総説および第六編土木・交通編に詳述してあるので参照されたい。ここでは、本町河川の特質についてふれておきたい。

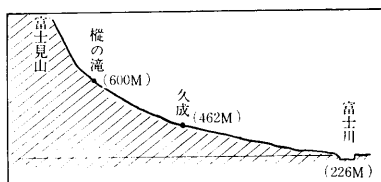
手打沢川は、山王を水源とする北沢と、荻を水源とする南沢が、手打沢温泉付近で合流し富士川に注いでいる。全長三三〇餘である。上流においては、曙礫岩層を浸蝕してつくられたV字形の溪谷をつくっており、平時は水量が少なく、出水時（台風時）には凝結度の弱い岩相を崩壊し土砂の運搬作用が激しい川である。

寺沢川は、樫の滝を水源とする久成川と、平須の中草里を水源とする押手沢と、平須の細久保を水源とする石畑川が寺沢の中河原で合流し本町で一ばん急流をなしている川で全長五七〇〇^ノである。

(右図参照)

夜子沢川は、平須の糸瀬の滝を水源とする南沢と、矢細工の滝を水源とする池ノ沢川とを合流し、全長四七〇〇^ノのV字形の溪谷をつくる川である。

曙川は、古長谷川・宝珠院川・後山川・遅沢川などを合流し、全



寺沢川の勾配



富士川と早川の合流点を望む

長三〇二五^ノの川で、上流は礫層を激しく浸蝕し、本町では最も典型的なV字形の溪谷をつくっている。

江尻窪川全長四六〇〇^ノ、田原沢川全長三九〇〇^ノ、一色川全長四一〇〇^ノである。

本町の河川の特徴は、地形が急峻であるため急流であること、地質が礫層や、砂岩などであるため軟弱で浸蝕されやすくV字形の溪谷をなしていること、急流であるため土砂の運搬作用がさかであることなどである。また、本町のすべての河川の両岸には河岸段丘が発達し水田として利用されている。

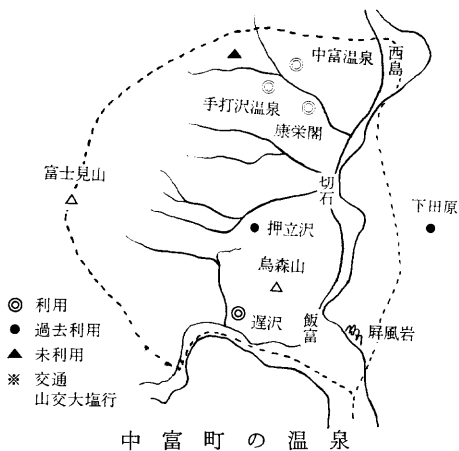
第五節 温泉

本町の温泉の歴史は古いものであり、甲斐国志に「磐石沢、大塩村ノ北ニ在リ、其水褐色ニシテ砂石ヲ染ム、此外小溪三四皆手打沢川ニ入ル又温泉アリ」と記されている。

磐石^{いわたし}というのは明礬石^{みんらんせき}のことで染料などの原料につかわれるものである。

鉱泉が硫化水素の臭いがあるので昔も何らかの形で利用されていたことと想像される。この鉱泉を最初に利用したのは、手打沢の深沢始末氏(故人・現手打沢温泉の開発者)で明治三三(一九〇〇)年に山梨県衛生検査所に鉱泉分析をし、鉱泉利用を出願している。

本町だけでなく、富士川層群には、身延町・南部町・富沢町・下部町にわたっていたところ鉱泉が湧出している。



本町の温泉は、下部累層・烏森山累層の砂岩・頁岩などの小割目から湧出している。この割目は、曙礫岩と接触する部分で曙礫岩層を透過した地下水が、その底部から湧出するものである。種々の鉱物成分（マグネシウム・ナトリウム・カルシウム・アルミニウム・硫酸・磷酸・硫化水素・鉄分など）を溶かした低温（摂氏一五度）の鉱泉である。

中富町温泉の湧出場所（図参照）

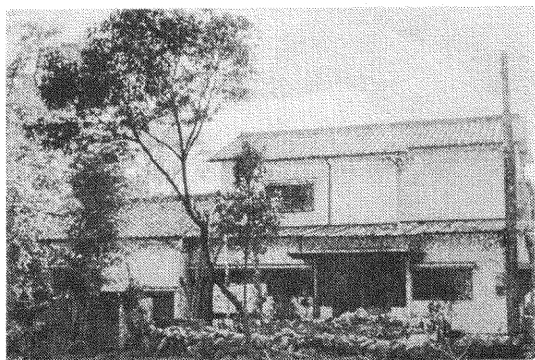
○手打沢 三か所利用（手打沢温泉・中富温泉・康栄閣）

○大塩 未利用（大塩農協裏の沢）

○夜子沢 過去利用（貝化石のある押立沢、鉄分多し）



手 打 沢 温 泉



中 富 温 泉

○遅 沢 利 用（七号台風で埋まったが現在復旧）

○上田原 過去利用（段西の温泉、甲斐国志に記述）

鉱泉の内容

○源泉名 手打沢温泉

○泉質 単純泉（硫化水素臭・アルカリ性）

○適應症 慢性痛風、創傷、慢性皮膚病、高血壓、神經症、胃病

慢性婦人疾患などで入浴、または飲用すると効果があ
る。

○源泉名 中富温泉

○泉 質 単純硫化

水素泉

○適応症

慢性くつ

病、慢性

痛風、腺

病、諸種

の麻痺、

慢性鼻咽

喉および

気管支カ

タル、慢

性婦人病

梅毒、鉛

および水

銀中毒症

などに効果がある。

○源泉名

康栄閣

○泉 質

石膏泉

○適応症

慢性関節リュウマチス、神経痛、火傷、創傷、気管支

カタル、痛風、慢性便秘、慢性皮膚病、痔疾、麻疹な

どに効果がある。特にこの鉱泉はラドンの含有があり

一名ラヂウム鉱泉といわれている。

本町の鉱泉は、手打沢川の岸辺にあり、春の若葉、ホトトギスの



康 栄 閣 温 泉 (手打沢)

声、夏はカジカの声、秋のモミジと四季の変化にとみ、山菜料理は湯治客に風情をそえてくれる。

○源泉名 遅沢温泉

(志坊温泉)

○泉 質 単純硫化

水素泉

○適応症

慢性皮膚

病、神経

症、慢性

胃腸病、

痔疾、麻

疹などに

効果があ

る。

遅沢温泉はかつて、

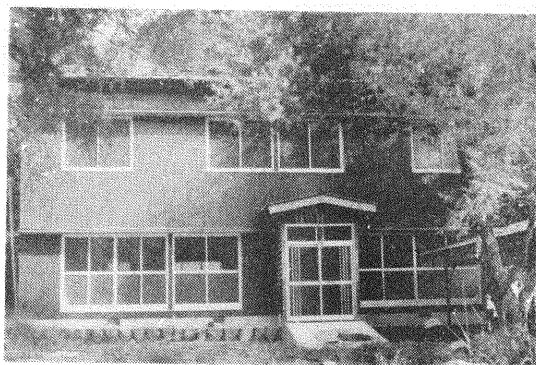
志坊温泉ともいわれ、

昭和四十六年末新築改修

された。

早川橋から徒歩五

分、早川の溪流に望み静かな温泉である。



遅 沢 温 泉 (遅沢)

第二章 気 象

第一節 気象の概況

中富町を山梨県の気候区分によってみると、多雨高温区（甲府盆地以南の富士川流域）にはいる。気温、降水量からみると別表のようである。

年平均気温は一四・五度で、甲府に比べると、〇・三度高く、南部町と比べると、〇・三度低い。小淵沢より三・八度、山中湖より五、六度高い気温である。

降水量は、年間、一五〇七ミリで、甲府より二六八ミリ多く、南部町より八〇九ミリ少ない。

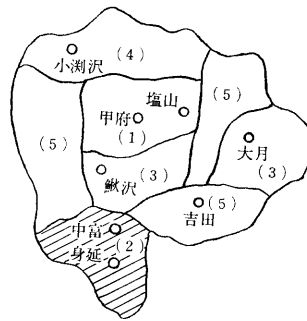
中富町は、多雨高温区に属するが、降水量はこの区分のなかでは少なく、むしろ鰍沢町の属する平雨高温区の特徴をもっている。

これは、本町が西側に富士見山、東側に御坂山系の連山をひかえ、富士川の狭谷に位置するためと考えられる。

次に、本町が県下の気候区分の中で、どのような位置をしめるかをみると下図のようである。

この気候区分は、気候を決定する二大要素、気温と降水量とから

山梨県気候区分図



- 1 小雨高温区
- 2 多雨高温区
- 3 平雨高温区
- 4 小雨冷涼区
- 5 多雨冷涼区

区分したものである。

1、小雨高温区 甲府盆地

年平均気温一二度—一四度で気温較差が大きく、降水量は年一四〇〇ミリ以下で、非常に乾燥し、内陸性気候の典型的地区。

2、多雨高温区 甲府盆地以南の富士川流域

年平均気温一四度以上で年間の降水量は二〇〇〇ミリをこえて湿度が高く、気候温和で積雪は、年数回、海岸的気候に近い地区。

3、平雨高温区 鰍沢・大月・上野原を中心とした桂川流域

年平均気温一二度―一四度で、降水量は年一四〇〇―二〇〇〇ミリで多分に内陸的気候の地区。

4、小雨冷涼区 八ヶ岳山麓、甲府盆地以北の山岳地域

年平均気温一二度以下で、一月、二月の平均気温は、いずれも零度以下となり、年降水量は一三〇〇ミリ前後で非常に乾燥する地区。

5、多雨冷涼区 富士五湖地方、西部山岳地帯、丹波川上流

年平均気温一二度以下で、一月、二月の平均気温は零度以下となり、降水量二〇〇〇ミリを突破する地区。

第二節 気象要素

一 気温

(一) 気温の年変化

一般にいわれる、春暖、夏暑、秋涼、冬冷の現象を山梨県気象年報による区分の方法によって、中富町の四季を区分してみると次のようである。年間の気温の変化は、昭和三二年―昭和四〇年までの九年間の甲南中学校で観測した記録に基づくものである。(表一)

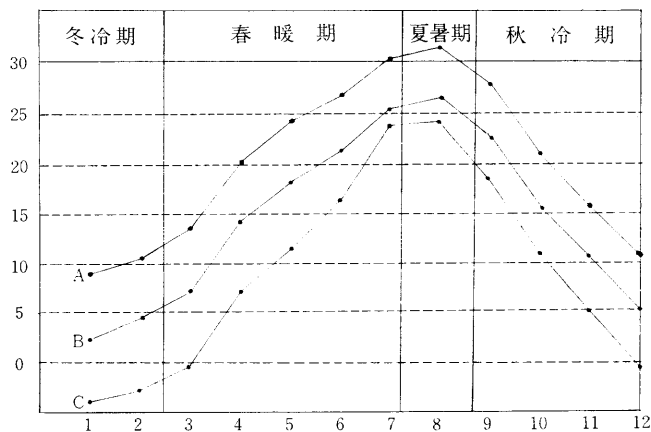
春暖期 気温が〇度以上、三〇度以下の範囲内で変化する期間。

夏暑期 最高気温が連日三〇度を必ず越える期間。

秋涼期 春暖期と同様。

表1 中富町の気温の変化 (1957~1965)

A 最高気温 B 平均気温 C 最低気温



冬冷期 最低気温が必ず氷点下になる期間。
ア、春暖期を次の三期に区分できる。

気温は零下を脱して強く上昇はじめ、日中の最高気温は二

〇度近くなることも珍しくないが、天気は動揺しやすく、暖湿で南風の快晴があるかと思えば北風の寒冷な日もある。

(4) 晩 霜 期

高気圧性の快晴が多く、日中の最高気温は二〇度を越え、初夏を思わせるが、夜間は急に気温が低下して時に結霜をみる。

(ウ) 梅 雨 期

六月中旬より七月上旬までの陰湿な曇天、雨天の続くこの期は、気温がやや低めとなり、日照時間はきわめて少なくなる。

イ、夏 暑 期

この期は、梅雨前線の北上通過により、陰気な天気から解放されて本格的な夏となる。最高気温は連日三〇度を必ず突破し、平均気温は二五度以上、最低気温は二〇度以下にならない。本町では、約一か月間である。

ウ、秋 涼 期

この期は、春暖期と同様で気温は〇度より三〇度の間で変化し本町では約四か月間この期にあたる。

エ、冬 冷 期

氷点上のみで変動することのまったくない期間で、夜間は必ず氷点下になる。十二月上旬より二月中旬までの約二か月である。

(二) 最高最低気温

甲南中学校観測所で昭和三二(一九五七)年からの記録によると、最高の極は、昭和四一年八月八日、三八・五度であり、最低の極は、昭和三八年一月二六日の氷点下一二度である。各地区の最高

・最低気温を示すと表Ⅱ(49ページ)のようである。

最高年平均では、身延・南部とほぼ同じで、甲府・鰺沢と比較すると〇・二度高い気温である。

最低年平均は、各地区と比較するとすべて低く、南部より一・四度、甲府よりは〇・一度低くなっている。

最高気温、八月についてみると、三二度で各地区よりも〇・六度―一・二度高く、最低の一月をみても氷点下三・九度で各地区よりも〇・四度―二・五度低い。これは、本町の気象概況で述べたように本町の複雑な地形による気象変化のためである。

夏と冬の温度差をみると、本町が三五・九度、甲府が三四・九度、鰺沢が三四・三度、身延が三三・五度、南部が三二・二度である。内陸の気候とされている甲府と比較してみると一度の差がある。

甲府盆地が内陸性の気候というが、夏と冬の気温差だけみると中富町の方がむしろ内陸的な気候だといえる。この現象をもう少し分析してみると、一つには観測所のある甲南中学校の位置のことが考えられる。背後に権現山を背負い、前は富士川、下田原山という、気象現象で最も影響を受けやすい条件にあることや、日照時間・風向などによる現象も、一つには内陸的な現象を生み出していると考えられる。

一 一 降 水 量

中富町の月別平均降水量は表Ⅲ(73ページ)のようである。四月

第二章 気 象

表Ⅱ 中富町の最高・最低気温と甲府・鰍沢・身延・南部との比較
中富 (1957～1965) 他 (1951～1960)

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
項目	地名													
最高	中富	8.7	10.2	13.6	20.0	23.5	26.4	30.3	32.0	27.3	21.6	16.8	11.8	20.2
	甲府	8.3	10.1	14.2	19.6	23.3	26.4	30.0	31.4	26.9	21.6	16.6	11.5	20.0
	鰍沢	8.2	10.0	14.0	19.5	23.4	26.3	29.7	31.4	26.6	21.6	16.4	11.4	20.0
	身延	9.3	10.8	14.6	19.5	23.6	27.2	29.4	31.1	27.0	21.9	17.0	12.2	20.2
	南部	9.7	11.2	14.4	19.4	23.5	25.9	28.9	30.8	26.9	22.1	17.3	12.9	20.3
最低	中富	-3.9	-2.7	0.4	7.4	11.6	16.3	21.2	21.6	17.9	11.2	5.1	-0.9	8.8
	甲府	-3.5	-2.1	1.8	7.0	11.1	16.6	21.4	21.9	18.2	11.2	4.6	-1.1	8.9
	鰍沢	-2.9	-1.7	2.1	7.3	11.2	16.4	21.0	21.7	18.2	11.3	5.0	-0.6	9.1
	身延	-2.4	-1.1	2.5	8.1	11.8	16.5	21.2	21.8	18.5	12.2	6.0	0.1	9.6
	南部	-1.4	-0.4	2.8	8.3	12.3	16.9	21.1	22.2	18.8	12.8	6.9	1.2	10.2

中富町の天気現象日数 (1957～1965) 山梨県の気象 (75年報)

月	雨	雪	ひょう	あられ	霧	濃煙霧	雷電	霜	霜柱	結氷	快晴	曇天
1	5.7	2.2	0.0	0.2	0.6	0.0	0.0	21.5	11.8	26.0	17.0	9.2
2	5.8	1.7	—	0.2	0.3	0.0	0.0	19.9	9.6	19.3	14.2	9.1
3	8.2	1.0	—	0.1	0.3	0.0	0.0	13.7	3.7	13.8	12.3	11.0
4	12.3	0.0	—	—	0.2	0.0	0.1	2.7	0.2	1.3	9.0	12.3
5	11.0	—	—	—	0.0	0.0	0.4	—	—	—	8.9	14.9
6	14.6	—	—	—	0.0	0.0	0.8	—	—	—	4.4	18.6
7	14.2	—	—	—	0.0	0.0	1.3	—	—	—	5.6	17.1
8	11.3	—	—	—	0.0	0.0	1.8	—	—	—	8.1	11.0
9	12.3	—	—	—	0.3	0.0	0.6	—	—	—	6.8	15.0
10	11.2	—	—	—	1.1	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	9.8	14.3
11	9.6	—	—	—	2.7	0.1	0.1	8.1	1.2	2.9	11.2	11.8
12	5.7	0.4	—	0.0	1.1	0.1	0.2	22.4	11.1	20.3	17.9	8.2
全年	125.8	5.3	0.0	0.7	6.6	0.2	5.3	88.6	37.6	83.6	125.2	152.5

から十月までは一〇〇ミリ以上の降水量があり、六月の梅雨期、九月の台風期には二〇〇ミリ以上の降水量がある。

十一月から三月までは五〇―七〇ミリで割合降水量が少なくない。

中富町の最大降水量は昭和三四年八月一三日、七号台風の時で二五二ミリを記録している。降水日量の最大は表Ⅳ(75ページ)のとおりである。

中富町の降水日数は、一三一日で、最高降水日数は、六月の一四・六日で、最低降水日数は二月で七・五日である。

三 積雪・降霜・結氷

中富町における初雪は平年は二月三〇日で、終雪は三月五日で初終間日数は六五日間である。

また、今までの記録では初雪が昭和三七（一九六二）年二月五日が最も早く、終雪は昭和三九（一九六四）年三月二七日である。

降雪日数は、昭和三二（一九五七）年―昭和四〇（一九六五）年の九か年間の平均日数は五・三日で、積雪の最高は昭和四三（一九六八）年二月一六日の五三センチである。（表Ⅴ 75ページ）

降霜は、天気現象日数表のように、昭和三二年―昭和四五年の平均降霜日数は、八八・六日で、平年初霜は一月三日、終霜は四月七日である。霜が早かったのは、昭和三七（一九六三）年一〇月一六日、最晩霜は昭和四四（一九六九）年四月二〇日である。

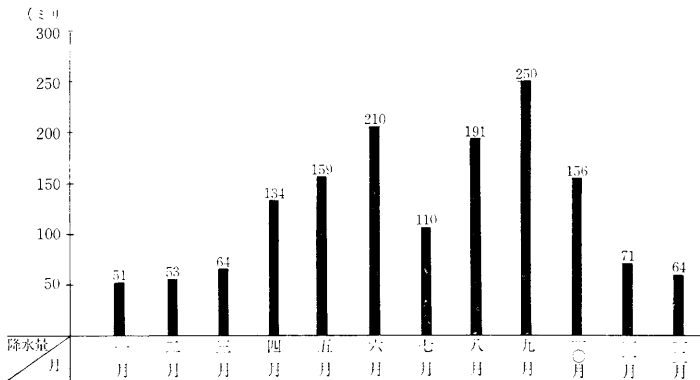
結氷日数は平年八三・六日で、一月の結氷日数はそれぞれ二〇日以上である。平年は、初結氷は二月二五日、終結氷は四月二日である。

いまままでに最も早い結氷は、昭和四三（一九六八）年十一月一日、終結氷日は、昭和四〇（一九六五）年四月二日である。

四 風

風は地形の影響を大きくうけるもので、一般的には海陸風（日中

表Ⅲ 中富町の月別平均降水量（1957～1965）



山梨県の気象（75年報）

海の方から陸地に向かつて吹き、夜間、陸地から海に向かつて吹く風）、山谷風（日中は谷間から山頂に向かつて吹き、夜間は山頂から平地に向かつて吹おろきす風）、季節風（夏は太平洋から大陸に向かつて吹く南東風、冬は大陸から太平洋に向かつて吹く北西の風）などに大別されている。

中富町における風についてみると、富士川に沿った方向での風と富士見山か

第二章 気 象

表Ⅳ 中 富 町 の 月 別 最 大 降 水 量

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	最多
mm	47	58	65	66	150	237	141	252	183	101	49	73	252
年	1959	1958	1967	1961	1965	1961	1958	1959	1958	1959	1962	1959	1959年
日	29	2	21	15	26	27	22	13	26	18	3	2	8月13日

山梨県の気象 (75年報)

表Ⅴ 中 富 町 の 月 別 最 深 降 積 雪 量

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
積雪平均日数	2.2	1.7	1.0	0.0	—	—	—	—	—	—	—	0.4	年 5.3
最 深 (cm)	20	53	20	—	—	—	—	—	—	—	—	12	最深 53cm
年	1962	1968	1969	—	—	—	—	—	—	—	—	1968	1968年2月
日	2	16	5	—	—	—	—	—	—	—	—	15	16日

山梨県の気象 (75年報)

表Ⅵ 中富町の最大風速・平均風速および風が吹き易い方向推定

地 点	最大風速 m/s	平 均 風 速 m/s		開 放 方 向
		暖 候 期	寒 候 期	
中 富 町	20.7	1.58	2.32	北 ・ 南

山梨県の気象 (75年報)

第三節 気象と災害

一 風 水 害

気象災害は、風害、水害、冷害、凍霜害、干ばつ、地震、スモッグなど、自然現象が原因となつて起る災害である。風水害についてみると、有史以来いくつかの災害が記録としてのこされている。

日本武尊が甲斐に入国したおりの説話、僧行基の養老年間（七一八年ごろ）の富士川の改修、御勅使川の氾濫によって甲府盆地が大湖水になった天長二（八二五）年の記録、その後、武田信玄在世時代、特に天文年間（一五四〇—一五四三年ごろ）の洪水はおびただしいものがあり、信玄の治水工事の一つとして竜王町に「信玄堤」が現在ものこされている。

らの山風、逆に富士見山への谷風とがある。
本町の地形は複雑であるため地域によってその方向は一定していない。

風向・風速については、甲府、河口湖において詳細な記録がなされているが、その他の地域では、毎日午前九時（山風・谷風の交替期）の記録にもとづいて、最大風速・風の吹き易い方向を推定している。

上の表（表Ⅵ）は甲南中学校の記録をもとに、甲府地方気象台で推定したものである。

死者 50 名以上の風水害(山梨県)

1. 死者	233名	明治40年8月21日～28日(1907年)	台風
2. 死者	174名	昭和41年9月21日～25日(1966年)	26号台風
3. 死者	150名	明治31年9月4日～7日(1898年)	台風
4. 死者	90名	昭和34年8月12日～13日(1959年)	7号台風
5. 死者	50名	大正元年9月22日～23日(1912年)	台風

山梨県の気象(75年報)

明治以後、明治一八(一八八五)年、三一(一八九八)年と大風水害があり、さらに、本県としては未曾有といわれる大水害が、明治四〇(一九〇七)年、明治四三(一九一〇)年に発生している。

明治四〇年の大水害は、二つの台風が本土に接近し、八月二日から二八日まで雨が降り続き、甲府で三二七 mm 、南部四六九 mm 、鯉沢三〇五 mm 、大月七一八 mm などの降水量があり、風は甲府で最大風速三・二 m/s の雨台風であった。

こうした県下の状況から判断して、中富町も相当の降水量があったと考えられる。この台風で県下では二二三名の死者があり東八代、南・北都留地区が最も被害が多くあった。明治四三年の台風は、甲府では八月三日から一三日までの二日間のうち、雨が降らなかったのは一日だけであとは毎日降り続き総雨量五三四 mm が記録されている。

明治四四(一九一一)年に山梨県の総面積の三分ノ一に当る山林が恩賜林として下賜された。

くだつて、大正元(一九一〇)年の台

風、昭和一〇(一九二二)年九月二日―二六日の台風においては、本町手打沢部落に大災害が発生している。

近年になって、昭和三四(一九五九)年八月二日―四日には台風七号が本県を縦断するという最悪の日を迎え、明治四〇年以來の大災害となった。また、この年の九月二六日には超大型台風である台風一五号(伊勢湾台風)が名古屋付近を通過して、県下では最大雨量四八七 mm (雨畑)、最大風速二九・八 m/s (甲府)最大瞬間風速三七・二 m/s (甲府)に達する大暴風となった。

台風による災害の内容は第七編第三章第一節を参照していただきたい。次に台風七号の状況についてくわしくのべてみたい。

○昭和四三年八月の台風七号

台風七号は、八月一〇日九時ごろ、マリアナ群島の東方洋上に一〇六 mm の弱い熱帯性低気圧が発生したもので、毎時二〇―二五 km の速さで西西北西ないし北西に進んだ。次第に発達して、中心気圧は九六 mm 、中心付近の最大風速は四五 m/s で、風速二五 m/s 以上の暴風半径は一〇 km で台風としては小型ではあるが中心付近の風は猛烈なものに成長して、一三日の夕刻には毎時五〇 km 、一四日六時半ごろ富士川河口付近に上陸してからは速度が六〇 km にもなり、台風になってから四五時間で本土に上陸してしまつた。上陸後の気象経過をみると、一四日八時ごろ本県は大暴風圏にはいつてしまった。

台風の進路は別図を参照していただきたい。富士川河口付近に六時半ごろ上陸し、七時には南部町付近、八時には八ヶ岳付近を通過

第二章 気 象

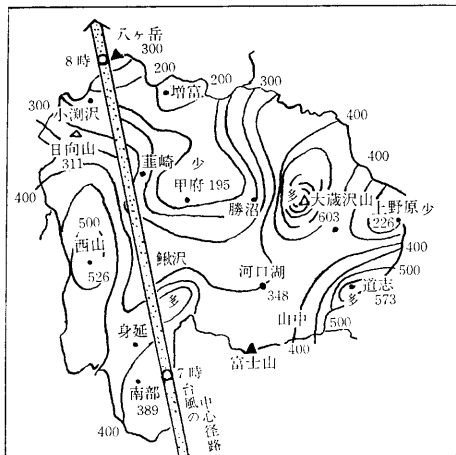
台風 7 号による被害（山梨県）

区 分	人 数
死 亡	66
行 方 不 明	24
負 傷	794
計	884

区 分	戸 数
家 屋 流 失	303
全 壊	1,659
半 壊	4,574
床 上 浸 水	2,615
床 下 浸 水	11,830
一 部 破 損	31,640
小 計	52,621
非 住 家 損 壊	9,905

山梨県の気象（75年報）

台風 7 号降水量分布図



台風 7 号 甲府での観測

種 別	観 測 値	起 日
最 低 気 圧 (海面)	968.6mb	14日07時28分
日 最 大 風 速	E S E 33.9m/s	14日07時25分
最 大 瞬 間 風 速	E S E 42.2m/s	14日07時25分
降 水 量	総 量	194.7mm 12日～13日
	日 最 大 降 水	160.7mm 13日
	1 時 間 最 大	20.4mm 14日02時28分
	10 分 間 最 大	8.4mm 14日02時44分

山梨県の気象（75年報）

して一〇時ごろには日本海にぬけ、二時ごろには沿海州に達して勢力が衰えて温帯性低気圧となった。この間、本県においては、甲府では東南東三・九m/s、最大瞬間風速東南東四三・二m/sという暴風が吹いた。

これは、甲府地方気象台創設以来の記録である。

本町においても風のため屋根をふきとばされたり、倒壊した家屋が多数発生した。

雨量は上図のようであるが、台風六号が八日から九

日にかけて通過した後だったために、本州南岸に停滞していた前線が活発化し、一二日一時ごろから雨が降り出して道志村では、一日一時間に八〇 $\frac{ミ}{リ}$ 、甲府で二〇・四 $\frac{ミ}{リ}$ 、南部で一日二三時から二四時までに三五・七 $\frac{ミ}{リ}$ 、一日四六時から七時までの一時間に六〇 $\frac{ミ}{リ}$ の降水量が記録されている。

本町においても、昭和四三年八月一日、最大日量二五 $\frac{ミ}{リ}$ の降水量を記録して甲南中学校観測所はじまって以来のものであった。

本県の降水量は、甲府周辺から北部山岳地帯にかけては、比較的すくなく二〇 $\frac{ミ}{リ}$ 内外、その他の地域は三〇〇—四〇〇 $\frac{ミ}{リ}$ をこえ、特に道志川、早川流域および東部山岳地帯では五〇〇 $\frac{ミ}{リ}$ 以上に達し、大蔵沢山では六〇三 $\frac{ミ}{リ}$ を記録した。

河川の増水も急激になり、本町の河川という河川はすべて氾濫し、堤防、道路、田畑などの決壊、地すべり、山くずれなどいじりしいものであった。特に、本町の地形、地質が複雑であり、第三紀のやわらかい堆積岩相であるため土砂の崩壊、流出が多量に行なわれた。現在、手打沢川・寺沢川はじめ本町の中小河川は土木工事が完成したが、これは昭和四三年災害以降のことである。

また、富士川は、笛吹川、釜無川の増水により、西島・切石・八日市場・下田原は明治の大洪水以来の増水で浸水家屋が多数発生した。飯富地区は、早川の増水で、合流点の流水が停滞し逆流するほどの状況であった。

○その他の台風

昭和三四年九月三日—二七日の台風一五号（伊勢湾台風）は、サイパン島北東方およそ一五〇 $\frac{キ}{ロ}$ に発達し、二六日潮岬に上陸したときは、中心気圧九二九・二 $\frac{ミ}{リ}$ 、中心付近の最大風速五〇 $\frac{m}{s}$ 、二五 $\frac{m}{s}$ 以上の暴風半径三四〇 $\frac{キ}{ロ}$ 、毎時六〇 $\frac{ミ}{リ}$ という大型台風で六時間あまりで日本本土を縦断して多くの被害をもたらした。

本県においては、早川流域に集中豪雨があり、奈良田三三八 $\frac{ミ}{リ}$ 、雨畑三八八 $\frac{ミ}{リ}$ 、御殿山三七三 $\frac{ミ}{リ}$ などで、二六日の台風通過の日最大降水量の記録をのこしている。

本町においては、台風七号のあとで災害が増加していった。

昭和四一（一九六六）年九月に台風二四・二五・二六号が続いて発生し、台風二十六号は本県を通過し、南都留郡足和田村に大災害をもたらし、本町においても雁木部落の土砂くずれで家屋の倒壊、死者一名の被害をはじめ、多くの災害をもたらした。

二 地 震

地震の起こる原因については次のような学説が主なものである。

(1) 断層説

地殻は造山運動によって次第に歪みを生じ大きな力を受けている。

この力があまりに大きくなって地殻がその力をささえきれなくな

震度別有感地震回数
(気象50年報)

震 度	回 数
微 震	19.0
軽 震	2.7
弱 震	1.5
中 震	0.5
強 震	0.3
烈 震	0.0
計	24.0

なわち、有感地震は年に二四回程度あり、このうち相当強く感ずるものは年一回程度である。

(3) 岩漿爆発説
岩漿貫入説にちよつとにかよったところがあり、地殻の弱いところに岩漿が貫入して爆発をおこす、この衝撃で地震がおこるという説である。

このように地震が起こる原因にはいくつもあるが、甲府気象台の

記録によると、人体に感ずるもの、感じないものの合計は一年間に多い年では一五〇〇回もある。このうち人体に感ずるものだけを震度別に年間の平均を出してみると、表のようである。す

ると地殻のその部分に割れ目を生じる。この時の衝動が周囲に波及するのが地震であり、その時生じた割れ目が断層であるという説である。

(2) 岩漿貫入説

地殻内部の岩漿は、物理的に不安定な状態にあるのでその一部が気化したり、凝固したり、結晶したりすると体積が急に増減するの

(3) 岩漿爆発説

甲府気象台が地震観測開始以来もつとも強く感じたのは、大正一二(一九二三)年九月一日の関東大震災および翌一三年一月一五日の丹沢山地震で、ともに震度は列震で、県内に被害を生じた。関東大震災の時には、石塔がたおれたり、余震などのため、「かや」を外につつて夜を過ごしたという話である。南巨摩郡も激甚地で死者三名、負傷者二三名、住家全壊八〇戸、半壊三四六戸で、その被害の大部分は鰍沢町であった。

西八代郡は比較的軽微で、死者二名(古閑)負傷者二名(高田)住家全壊七戸、半壊四八戸であった(大正山梨県誌)。次は明治四二(一九〇九)年八月一四日の近江の姉川地震で震度は強震であった。

三 その他の災害

風水害に続いての自然の災害は、雪害である。春先き降る「ボタ雪」といわれる重い雪によって竹・杉・檜などの雪折れによる被害である。昭和四四年には二回にわたってこの雪害があり、七十八年生から一五年生の杉・檜に多くの雪折れの被害があった。

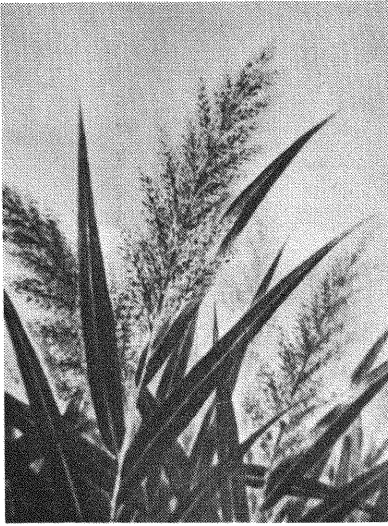
霜害も、晩霜によって桑の芽、バレイシヨの若芽などに被害をあたえる年もある。また、初霜による野菜類などの被害もある。

干ばつは、昭和四五(一九七〇)年一月から二月にかけて五〇余日の日照りが続き、農作物に多くの被害をあたえた。年によっては、ひょう害のある年もある。冷害による稲の被害なども時にある。

第三章 生 物

第一節 中富町の植物

中富町は気候的には多雨高温区に属している。地形は、富士見山（一六四〇呎）と、起伏の多い台地と、その間にはさまれた河岸段丘をもつ谷川筋の平地と、富士川とその兩岸に発達する沖積の平地



ア シ

とにわけられる。地質は、富士見山を構成する櫛形山累層と富士川層群・御坂層群（下田原・宮木を構成する地質）とから成り立っている。こうした、自然条件によって植物の生育は、それぞれ違った様相を呈している。

本町の植物を概観してみると、暖地性植物が多く、寒地性植物もみられ、富士見山には亜寒帯性植物がある。

本町の植物を、富士川沿い、中間地帯の丘陵地と平地、富士見山の植物にわけてその生育の状況を概観してみると次のようである。

一 富士川沿いの植物

富士川の沖積地（砂礫）や、川沿いに生育する植物は多種多様であるが、群落をなして自生しているのが特徴である。

オオマツヨイグサ、マツヨイグサ、アレチマツヨイグサ（アカバナ科）、カワラハハコ、カワラヨモギ、オトコヨモギ、アメリカセンダングサ、カワラニガナ、コメナモミ（キク科）、カワラナデシコ、フジナデシコ、フシグロ（ナデシコ科）、マメグンバイナズナ（アブラナ科）、ノイバラ（バラ科）、カモジグサ、ギョウジシバ、チガヤ、ガマノホグサ（イネ科）などである。

二 中間地帯の丘陵地と平地の植物

本町の中間地域（三〇〇—六〇〇畝）は起伏の多い丘陵地帯で、植林による、スギ、ヒノキ、マツ、カラマツの人工林と、クスギ、ナラなどの落葉樹と、モミ、ツガなどの常緑樹の自生樹木と、その中に自生するツツジ、ウツギなどの灌木と下草類とであり、湿地の岩肌や、沢沿いの日陰にはシダ類も群生している。



カワラヨモギ



尾羽根平の人工林（宮木）

○常緑樹木

本町の常緑樹は、スギ、ヒノキ、マツなどの植林によるものをのぞけば、落葉樹林の中に自生しているもので種類はあまり多くなくおもなものをあげると次のようである。

モミ、ツガ、アカマツ、クロマツ（マツ科）、シラカシ、アカカシ、ウラジロ（ブナ科）、カヤ（イチイ科）、ツバキ（ツバキ科）などである。

また、本町には竹林があるが、甲斐国志に「竹ノ美ナルハ（中



常品堂の宿り木（寺沢）

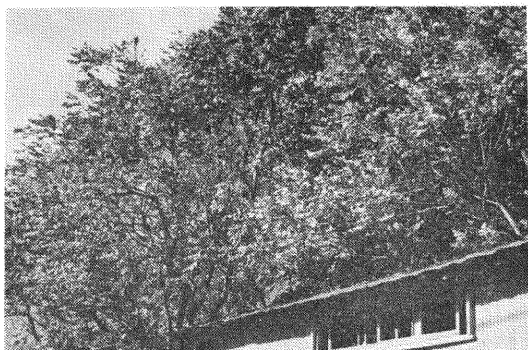
略)河内領ノ矢細工村等ナリ、公林ハ所在堤防ニ多シ云々」と記されている。矢細工の地名の起りも、今は見ることはできないが、六郷町楠甫、西島岩崎の川沿い、寺沢・夜子沢川の河口は公林として、水防の役目を果たしたものである。マダケ、ハチク、モウソウチク、ホテイチク、クロチクなどの自生林がいたるところにある。

○落葉樹木

本町の山林といわれるのは、人工林(スギ、ヒノキ、マツ、カラ



クルミの花房



モクゲンジ(早川橋付近)

に群落をなして自生している。

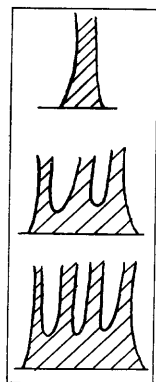
モクゲンジは、日本植物誌によると「落葉高木にして、若枝に往々短毛あり、葉は長さ二五—三〇センチ、長さ三—八センチの柄あり、若時通常下面に短軟毛あり、小葉は無柄、卵形にして草質、長さ四—一〇センチ、幅三—五センチ、粗に不整の欠刻または粗鋸歯あり、往々羽状に分裂し、無柄または稍無柄、鋭尖頭または鈍頭、花序は総状花序、花は径一センチ、黄色で小梗あり、蒴果は、洋紙質、三片に裂開し三角状卵形、種子は、径約七ミリになる」と記されている。

マツ)を除くとほとんどが、クスギ、ナラを中心とする落葉樹林と、その中に雑木といわれるシデ、ハンノキなどがまざって自生している。

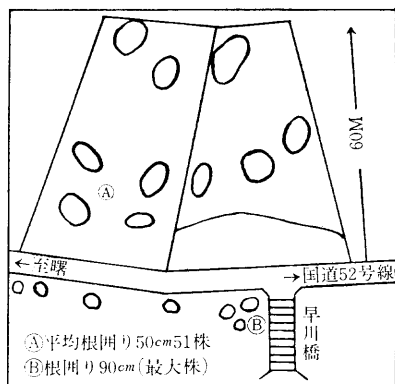
甲斐国志に「胡桃、諸村ニアリ、河内ヨリ出ズ云々」、「桐ハ河内領ニ多シ云々」と記されているが戦後一時桐の増植も行なわれた。

珍しい植物として本町中山出身の長沢幸雄(現若草町)の調査による、モクゲンジ(ムクロジ科)が本町の三ツ石早川橋際の標高二四〇—三〇〇センチの鳥森山累層の安山岩質凝灰角礫岩上

また、モクゲンジが珍しいのは本州（但馬・越前・周防）の海岸に野生状のものがあり、中国、朝鮮等に多く分布する。いわゆる日本海側に分布本拠をもつ植物分類地理学上の内帯要素に数えられる本種が太平洋側（外帯）の本地域に分布することである。なお本県に少数ではあるが芦川溪谷に分布しているが、早川橋際の群落にはおよばない。



樹 型



モクゲンジ分布図

文化庁の全国植物調査委員会が昭和四六（一九七一）年山梨県の調査をすすめているが、本群落を学術上貴重なものとして天然記念物に指定するよう長沢幸雄が報告する予定である。

そのほか、サワグルミ、オニグルミ、ヒメグルミ（クルミ科）、ヤマハンノキ、ハンノキ、イヌシデ、アカシデ（カバノキ科）、ヌルデ、ヤマウルシ（ウルシ科）、ネムノキ（マメ科）、ムクノキ、ケヤキ（ニレ科）、タラノキ、ハリギリ（ウコギ科）、クリ、ブナ、コナラ、ミズナラ（ブナ科）、ヤマザクラ、エドヒガン（バラ科）、トチノキ（トチノキ科）、ナツツバキ（ツバキ科）、ウリカエデ、イタヤカエデ、イロハモミジ（カエデ科）。

○ 灌 木

常緑樹や、落葉樹の中に自生する灌木類は種類が多く、おもなものをあげると次のようである。

ニガキ（ニガキ科）、ツルウメモドキ、ニシキギ、ツルマサキ（ニシキギ科）、アセビ、ヤマツツジ、ナツハゼ（ツツジ科）、ニワトコ、ニシキウツギ、タニウツギ（スイカズラ科）、イボタノキ、ヒイラギ（モクセイ科）、タマアジサイ、ウツギ、ヒメウツギ、タマアジサイ（ユキノシタ科）、マンリョウ、ヤブコウジ（ヤブコウジ科）、ナツグミ、アキグミ（アキグミ科）、ノブドウ、エビヅル、ツタ（ブドウ科）、イヌツゲ（モチノキ科）、ヤマブキ、ノイバラ、ナワシロイチゴ（バラ科）、ハゼノキ（カツノキ、メンブシ）（ウルシ科）。

○ 下 草 類

本町の山林の下草として繁茂する植物は、春から秋にかけて生育

し種類も多い、ほとんど花を咲かせるもので秋の七草などはその代表的なものである。

また、甲斐国志に「土歯、方言土甘草ト云フ、夏秋ノ間土中ヨリ生シテ香氣を發ス、掘リテ此ヲ食ス極メテ甘シ、河内ノ岩間、切石村辺ニ産ス、功能未詳」とある。

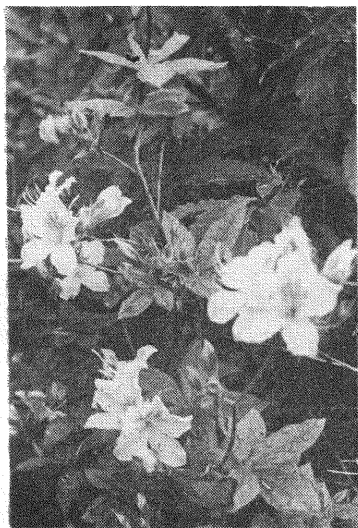
甘草（かんぞう）については、広辞林に次のように記されている。

「甘草（かんぞう）マメ科の多年草、中国北部に自生し、高さ約六〇—一〇〇センチ、葉は互生し羽状複葉で数個の小葉からなり、形は藤の葉に似ている。花は蝶形で淡紅色、夏から秋にかけて咲く、根は内部が黄色で甘味を持ち、医薬として用いられ、また、汁は甘味をつけるのに使われる。アマキ、アマクサ、スペインカンゾウ、ロシアカンゾウ、シベリヤカンゾウなどがある。」このことであるかはっきりしない、また、クヌギ林の土中に大きいので径四センチの褐色をした玉状のものがあり、これをくだいてたべると甘い味が



ヤマブキ（矢細工）

し、カンロといって食べられるものがある。そのほか、ヤマトリカブト、ヤマシヤクヤク、センニンソウ、ボタンズル、アキカラマツソウ、オウレン、ハンショウズル、クサボタン（キツネノボタン科）、ヤマユリ、ナルコユリ、チゴユリ、ヤブカンゾウ、ノカンゾウ、ギンラン、シュンラン、ホトトギス、ヤマホトトギス、ツクバネソウ（ユリ科）、オニドコロ、ヤマノイモ（ヤマノイモ科）、キンミズヒキ、ヤブヘビイチゴ、クサイイチゴ、シモツケ（バラ科）、ミツバ、ヤブニンジン、ウマノミツバ（セリ科）、リンドウ、フデリンドウ、ツルリンドウ（リンドウ科）、アキノタムラソウ、ジュウニヒトエ、ヤマハッカ、ウツボクサ、テンニンソウ、シモバシラ、オドリコソウ（シソ科）、ヤブミョウガ（ツククサ科）、アカショウ（ユキノシタ科）キヌタソウ、アカネ、クソカヅラ（アカネ科）、スイカヅラ（スイカヅラ科）カラスウリ（ウリ科）、キッコウハグマ、ノコンギク、リュウギク、ホソバノコウヤボウキ、コウヤボウキ、ヤブタラビコ、ヤクシソウ、センボンヤリ、ヒヨドリバナ、サジガタビソウ、ヤブタバコ、オケラ、ノギク、モミジガサ、シロヨメナ、タイアザミ、ノブキ（キク科）、ツリガネニンジン、ツルニンジン、キキョウ（キキョウ科）、オミナエシ、オトコナエシ（オミナエシ科）、キツネノカミソリ、ナツズイセン（ヒガンバナ科）、シャガ（アヤメ科）、アツモリソウ、ウマガエソウ、オオバノトシボソウ（ラン科）、コアカソ（イラクサ科）、カンアオイ、ランヨウアオイ（ウマノスズクサ科）、マルバスマイレ、タチツボスマイレ（スマイレ科）、ミヤマキケンマ、ヤブキソウ（ケシ科）ルリソウ、ヤマルリソウ（ムラサキ科）、ヒヨドリジョウゴ、ハタ



ムラサキツツジ (曙)



リンドウ

カホウズキ、ハシリドコロ(ナス科)、テイカヅラ(キョウチクトウ科)、クガイソウ(ゴマノハグサ科)、ヤブマメ、スズビトハギ、ノササゲ、コマツナギ、ナンテンハギ、フジ、ヤマハギ(マメ科) オカトラノオ(サクラソウ科)、ミズダマソウ(アカハナ科)、イカリソウ(ネギ科)、ウラシマソウ(サトイモ科)、ナキリスゲ(カヤツリグサ科)、チヂミザサ(イネ科)である。

○路傍、田畑の植物

本町の道路わき、田や畑の草むら、庭さき、水辺などに自生する雑草で、ペンペン草、モチグサなどのように方言で呼ばれるものや、外国からきた帰化植物など、名も知らないものもたくさんあるが、おもなものをあげると次のようである。

・路傍、草むらなどの植物

ドクダミ(ドクダミ科)、ゲンゲ、ヤハズソウ、ウマゴヤシ、ミヤコグサ、ムラサキツユクサ、シロツメグサ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ(マメ科)、ミチヤナギ、イタドリ、サナエタデ、イスタデ、オオイスタデ、スイバ(タデ科)、ヨモギ、ヨメナ、ノコンギク、センダングサ、アメリカセンダングサ、アレチノギク、ハルジオン、ハハコグサ、アキノハハコグサ、アキノノゲシ、ジシバリ、オニノゲシ、ノゲシ、ヒメジョオン、ヤナギヒメジョオン、ヒメムカシヨモギ、ノボロギク、ベニバナボロギク、タンポポ(キク科)、シバ、エノコログサ、キンエノコログサ、スズメノカタビラ、カモジグサ、コヌカグサ、コブナグサ、カラスムギ、ヒメアブラスキ、ギョウギシバ、チガヤ、メヒシバ、オヒシバ、チカラシバ、ススキ、イヌビエ(イネ科)、カヤツリグサ、コゴメカヤツリ

(カヤツリグサ科)、ヒナタイノコズチ、イヌビエ(ヒエ科)、トウダイグサ、ニシキソウ、コニシキソウ、コミカンソウ(ダイクサ科)、タテハコベツメクサ、ノミノフスマ、ウシハコベ、ハコベ(ナデシコ科)、スベリヒユ(スベリヒユ科)、センニンソウ(キンポウゲ科)、クワクサ、カナムグラ(クワ科)、カラムシ(イラクサ科)、アカザ(アカザ科)、ザクロソウ(ザクロソウ科)、ムラサキケンマ(ケシ科)、ナズナ、マメグンバイナズナ、イヌガラシ(アブラナ科)、キンミズヒキ、ヘビイチゴ(バラ科)、ゲンノ



スマレ・タンポポ(曙)



田の雑草

ショウコ(フウロウソウ科)、カタバミ(カタバミ科)、スマレ、タチツボスマレ、ヒメスマレ(スマレ科)、アレチマツヨイグサ、マツヨイグサ、オオマツヨイグサ(アカバナ科)、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、メハジキ、カキドウシ(シソ科)、チョウセンアサガオ、センナリホオズキ(ナス科)、チドメグサ、ヤブジラミ(セリ科)、イヌノフグリ、オオイヌノフグリ(ゴマノハグサ科)、オオバコ(オオバコ科)、ヒルガオ(ヒルガオ科)、ヤエムグラ、ハナムグラ、アカネ(アカネ科)、ツユクサ(ツユクサ科)、ノビル



畑の雑草

(ユリ科)、ヒガンバナ(ヒガンバナ科)。

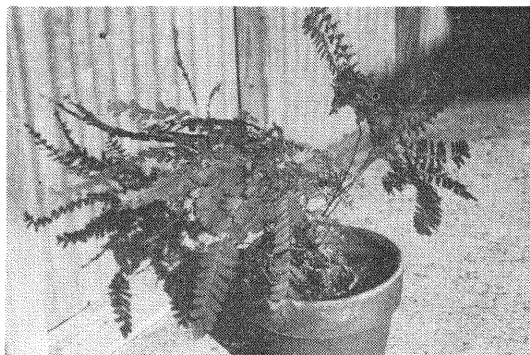
・田畑の植物

スベリヒユ(スベリヒユ科)、キツネノボタン、タガラシ(キンポウゲ科)、スズメノテッポウ、コブナグサ(イネ科)、コゴメカヤツリ、マツバイ、テンツキ、ヒデリコ、アゼテンツキ(カヤツリグサ科)、カラスビシヤク(サトイモ科)、ハコベ、コハコベ、ノミノフスマ(ナデシコ科)、ナズナ、タネツケバナ、イヌガラシ、グンバイナズナ(アブラナ科)、セリ(セリ科)、ホトケノザ(シソ科)、オオバコ(オオバコ科)、オオジシバリ(キク科)、イヌフグリ(ゴマノハグサ科)、ア

オウキクサ(ウキクサ科)、イボクサ(ツユクサ科)、コナギ(ミスアオイ科)、ツルボ(ユリ科)。

・水辺の植物

ガマ(ガマ科)、チガヤ、ジュズダマ(イネ科)、ウナギツカミ、ヤナギタデ、タニソバ、アキノウナギツカミ、ミゾソバ(タデ科)、タガラシ



ハコネシダ

(キンポウゲ科)、アメリカセンダングサ(キク科)。

○その他の植物

本町の全域にわたって、シダ類が群落をなして生育している。川沿いの湿地帯や、日陰の岩肌、竹林の下草、礫礫岩の凝結度の高い岩壁などに自生している。おもなものをあげると次のようである。

・ウラジロ

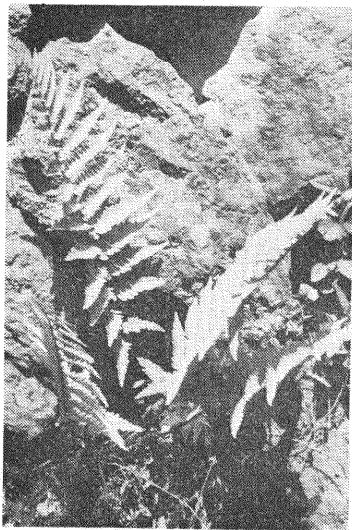
常緑性のシダで、寺沢川はじめ各河川の支流の沢に群落をなして自生している。

・ハコネシダ

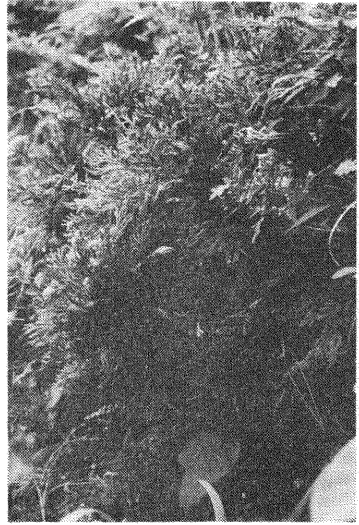
箱根山に多くあるためこの名がある。葉にしたともいわれ、茎が暗紫色で、葉がクジャクの模様似ていて美しいシダである。

・イワヒバ

通称、イワマツともいっている。本町の礫礫岩の岩壁に自生している。久成の城山、石畑の沢、川平の奥山などに多くみられる。鑑



ウラジロ



イワヒバ (矢細工)

賞用として庭園に植えられたり、^{わらぶき}萱葺屋根の棟に植えられている。葉が乾燥すれば巻き縮み、湿気があれば展開する性質をもっている。

・コシダ

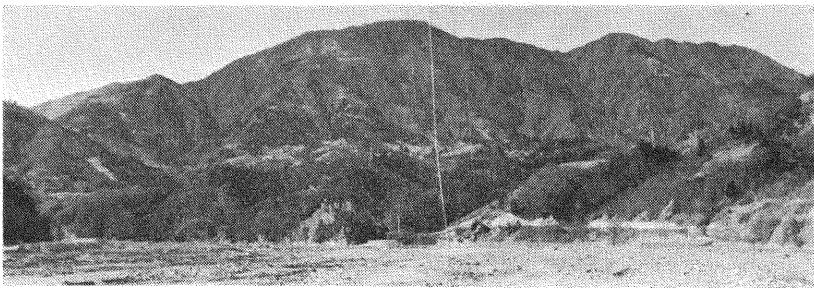
常緑性のシダ、このコシダは山地の日当たりのよい乾燥したところに群落をなして自生する。本町では、富士川沿いの岩壁や、日下がりなどに自生しているのがみられる。

その他、コモチシダ(シンガシラ科)、マメヅタ、ワラビ、ノキシノブ、サジラン、ヘラシダ(ウラボシ科)、イノモトソウ、タチシノブ(イノモトソウ科)、カニクサ〔ツルシノブ〕(カニクサ科)などである。菌類(キノコ)は略す。

三 富士見山の植物

富士見山は、現在頂上まで樹木がきられ、植林されて昔日の姿は失われたが、昔は一六四〇呎の頂上には、ツガの大木が自生し、カバノキ科のシラカンバ、ダテカンバなどが御殿山へ嶺続きに生育し、揚子につくるクロモジが自生し、巨木にはサルオガセの白い糸がたれ、自然の美しさを誇り登山者の目を楽しませてくれていた。

平須登山口から登っていくと、海拔八〇〇—九〇〇呎付近に広がる萱の群生がある。これは、萱山^{かやま}といって、荻嶺の一の平付近、堂平嶺、福原嶺にもあったが、現在は一部は植林されて美しい樹木林になっているところもあるが、一部は萱焼き(昔は春、入会権をもつ部落の人たちが新しい萱をつくるために総出で山焼きをした)をしないので雑



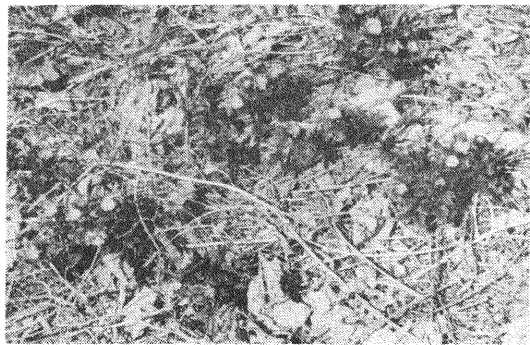
富士見山の山相

木がはびこり美しい萱原の姿が失なわれてしまっている。

また、アセビの群落

(堂平嶺Ⅱ二の平付近)や、ヤマツツジの群落、フクジュソウの群落などもある。フクジュソウ(キツネノボタン科)は早川町の赤沢部落にもあるが、中部地方以南では珍しく山梨県では南限ではないかと考えられる。そのほかおもなものをあげると、ダケカンバ、

シラカンバ、ミヤマハンノキ(カバノキ科)、クロモジ(クスノキ科)、ミネカエデ(カエデ科)、ツガ、コメツガ、モミ、オオシラビソ、カラマツ(マツ科)、トチノキ(トチノキ科)、ムラサキツリバナ、マユミ(ニシキギ科)、アセビ、ネジキ、ドウダンツツジ(ツツジ科)、イワカガミ、ノリウツギ(ユキノシタ科)、イワキボウシ、コオニユリ、ユキザサ、ツバメオモト、キヌガサソウ、エシレイソウ(ユリ科)、ハリブキ(ウコギ科)、バイカオウレン、ミヤマオダマキ(キンポウゲ科)、イワカガミ(イワウメ科)、ミ



フクジュソウ (富士見山)

ヤマシヤジン(キキョウ科)、ヤマハハコ、カニコウモリ、ヤマハズソウ、ヒゴタイ、キオン(キク科)、キンスゲ(カヤツリグサ科)、サルオガセ(サルオガセ科)、ジャコウソウ(クチビルバナ科)、チマギザサ〔クマザサ〕(イネ科)、ミヤマウヅラ(ラン科)。

名木は第九編に記す。

第二節 中富町の動物

中富町は全面積の六〇%が林野で占められ、幾筋かの河や沢、その間にある丘陵地や富士川は動物の生息には恵まれた地域である。

昭和三〇年ごろまでは、本町のどこでもキジの鳴き声を聞くことができた、山を歩けば足もとから飛びたつこともあったが、今ではそのような光景を見ることができなくなっている。また、明治から大正のはじめのように、寺沢川の上流(久成地区)、夜子沢川、曙川の上流でヤマメの姿を見たり、つい最近まであった富士川でのアユの釣り風景も今は見ることができない。富士川のアユについては、甲斐国志に「年魚、桂川、富士川ニテ捕ル者多シ毛智利ト云物ヲ竹ニテ造リ、藤索ニ釣り川中ニ浸シ魚下ニ俟ッテ之ヲ捕ル一挙シテ数千百頭ヲ獲ベシ、早川ノ鮎ハ鼻曲リト名ク、急流ヲ遡ルユエナリト云ウ、其ノ余ノ川ニハ多カラズ、塩蔵スルヲ黒漬ト云、曬乾シ繩ニ夾シタルモ佳ナリ、松平甲斐守ノ時八月ノ献上塩鮎ナリ云々」と記されている。

西島のカモの話や富士川の水鳥の姿もすくなくなつた。ツバメの

数や、夏の夜に飛びかうホタルの光りも昔話としてしか中富町にのこらなくなってきた。自然が人間の力によって変えられる、公害かも知れないが本町の動物について概観してみたい。

一 哺 乳 類

哺乳類のなかで富士見山の猿は、本町の特筆すべき動物としてあげられる。現在、数十匹の猿が群をなして棲息していて、時々、平須・堂平・矢細工部落に出没して田畑や、柿、栗などを荒らすことがある。平須の糸瀬の滝付近で餌付けをこころみたが失敗に、現在にいたっている。



昭和24年富士見山で生け捕られた猿

猿は、哺乳類・霊長目に属する動物の総称で、からだつきや動作が人間に似ており、知能の高いものが多い。アフリカ・マダガスカル・アジア

・ラテンアメリカなどの温帯地域に分布し、多くの種類がある。

形態は、手足の第一指（おや指）は他の四本とむかいあって、物を器用につかむことができる。手足の裏には裸出している指紋があり、つめは他の獣のように鉤づめではなく、平づめのことが多い。顔もほぼ裸出し、目は前方に向いている。鎖骨が発達し、四肢を前後左右に自由に動かすことができる。大脳はよく発達し、色覚、聴覚も発達している、このため嗅覚の発達はあまりよくない。

種類は、(1) 原猿類、もっとも原始的なサル類（キツネザル・アイ・ドウケザル・メガネザル）である。

(2) 広鼻猿類 ラテンアメリカに分布、顔が裸出していて尾が長い。左右の鼻孔が広く離れていて昼間行動する（ヨザル・ホエザル・オマキザル・クモザル・キヌザル）。

(3) 狭鼻猿類 広鼻猿類より進んだ猿で、しりだがあり、しりと顔が赤・青などあざやかな色をしていることが多い。鼻孔は左右が接近し下をむいている。単にサルという場合はこの狭鼻猿類をさす場合が多い。富士見山に棲息する猿はこの種に属し、ニホンザルである。この仲間には、アカゲザル・タイワンザル・カニクイザル・シンオザル・ブタオザル・マントヒヒ・マンドリル・テングザルなどがある。

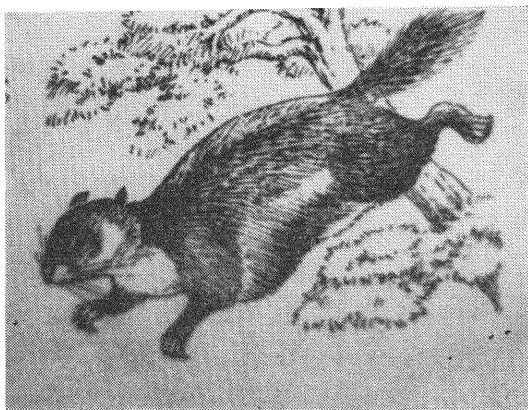
(4) 類人猿類 サル類ではもっとも進化した仲間、尾もほお袋もない。（テナガザル・オランウータン・チンパンジー・ゴリラ）生態は、ニホンザルについてみると、群をつくって生活する。群は、数匹の雄と雌とが中央に集まり、若い雄がそれをかこみ、最強の雄がボスとなって群をひきいる。若い雄は中央の集団にはいるこ

とは許されず、見張りや、外敵との戦いをする。富士見山の猿は二つぐらいの群をなして棲息しているようである。

サル類は、一産一子で生まれた子は胸に抱いて運び歩くが、これは他の哺乳類とちがった生態で子は長い間母親に育てられる。また昼行性で、樹上生活、地上生活の両方を行っている。よく知られる、サルの行動にもまねや、ノミとりがあるが、ものまねをするのはニホンザルの仲間狭鼻猿類に多く、これは一種の学習と考えられる。また、ノミとりは愛情の表現で、相手の毛をわけて皮膚を掃除しているもので、ふつうサルにはノミはつかない。

人間との関係では、小児麻痺のワクチン製造にアカゲザルがかわれている。サル類は、他の動物にくらべ人間の病気に多くかかるので病気の研究につかわれる。また、類人猿は、人類の心理その他の研究にたいせつなものである。

サルと民俗については、野生動物のなかでは人間ともっとも関係が深く、サルを神聖視する風習は世界的である。山王日吉や安芸の宮島のようにサルを神の使いとして祭っているところが各地にある。一般には、山の神の使いと考えられ、狩人は山のおやじ、山の人などという忌詞でこれをよんでゐる。また、サルは邪視（悪魔ににらまれること）を避けることがあると信じられ、とくにこれを馬屋に祭る例が多い。猿の音は「去る」に通ずるとして縁起をかついでいることもある。十二支の申は本来はサルではないが一般にはサルと考えられ、庚申信仰では、見ざる・聞かざる・いわざるの姿をした三猿の像を祭っている。三猿には妊娠・安産・子育ての祈願をするが、サルをお産の神とすることが多い。サルを主人公とした



二 鳥類

近年、鳥類も少なくなってきた。キジ、ヤマドリをはじめ野鳥の姿がめっきりへってきている。本町に棲息するおもなものをあげると次のようである。

(1) 夏鳥 冬季暖帯あるいは熱帯地ですごし、春より夏にかけて

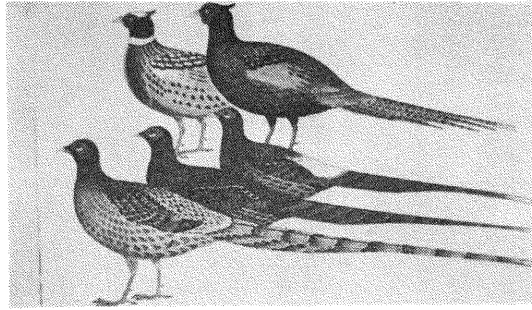
カワネズミ、コウモリ、ムササビ、モモンガ、モグラなどである。

「さるかに合戦」のような昔話なども多くある。利用面では、皮は毛皮として用いられ、武士の弓矢の鞆にこれを使用した。

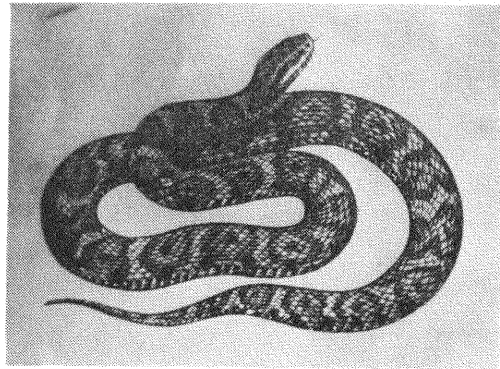
ム そのほか、イノシシが富士見山に出没することがある。リス、ノウサギ、アナグマ、キツネ、ハツカネズミ、

繁殖のため温帯を訪れるもので、本町にはツバメを始めとし、ホトトギス、アカショウビン、カッコウ、ミズコイドリ、ヨタカなども棲息している。

(2) 冬鳥 北方寒冷地より秋季渡来し、冬季温帯ですごす。カモが時々富士川に来ることがある。昔は、西島の堤防付近が湿地帯でカヤが繁茂したとき、カモの生棲地としてたくさん飛来してきた。ウズラも群をなして棲息していたが近年その姿が少なくなっている。そのほか、ツグミ、クイナなどである。



キ ジ



マ ム シ

(3) 漂鳥 季節によってわずかな距離を移動する鳥で、人家付近と山地との間を移動するウグイス、カケス、コノハズク、シジュウカラ、ヒバリ、ヒヨドリ、フクロウ、ミソサザイ、モズ、トビ、ヤマガラ、ルリビタキ、クマタカなどである。

(4) 留鳥 一年中同じ地域に棲息するもので、キジ、ヤマドリ、コジュケイ、カントウオナガドリ、カラス、セキレイ、ホウジロ、スズメ、ヤマバト、メジロ、カワセミなどである。

鳥類の増殖、保護のため、禁猟区、休猟区をもうけてその対策に



モリアオガエル（梨子 普明寺境内）

あたっている。野鳥の繁殖は益・害はあるが、人類の生存と深い関係をもつものであるから一層、野鳥の増殖、保護につとめなければならない。

三 爬 虫 類

爬虫類は、春から晩秋まで草むらや、人家の周囲などに棲息し、冬季の間、土中、岩石のき裂、石垣などで越冬する。甲斐国志に、「マムシ、河内領及九一色郷山中ニ多シ、雨畑山ニハ稀ニ烏蛇、白蛇ヲ捕フル者アリト云フ」と記されている。また、マムシは卵胎生で、生捕りにして焼酎漬で保存し、薬（切傷、熱さましなど）として利用する。そのほか、アオダイショウ、ジモグリ、シマヘビ、ヤマカガシ、トカゲなどである。

四 両 生 類

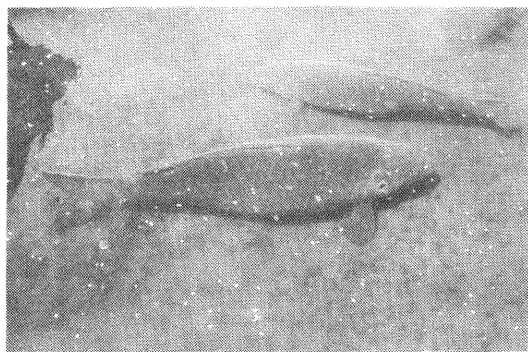
昭和四五年七月、西島の野田宣安と本町役場勤務、矢細工の佐野三郎によってモリアオガエルが梨子部落の普明寺境内で発見された。今まで、本町にはモリアオガエルの棲息地はないだろうとされていたが、この発見は貴重なものである。モリアオガエルは、身延町、南部町には数多く繁殖している。モリアオガエルは他のカエルに比べて特異な産卵習性をもつことで有名である。体色は緑色、暗緑色で、まばらに赤かつ色のはん紋がある。体長は、雄七^五分、雌九^五分、四月から六月に大きな泡状の卵を樹土に産む。ふ化した

おたまじゃくしは水中におちて成長する珍しいカエルで、吸盤が大きく吸いつく力も非常に強くもっている。

その他、アマガエル、アオガエル、トノサマガエル、アカガエル、ヤマアカガエル、カジカガエルなどである。珍しいものとして、シンショウウオが矢細工の曙川上流に棲む。（文化財の項参照）

五 魚 類

中富町の小河川には台風七号（昭和三四年八月二一—四日）以前までは、ウナギ、ハヤ、カジカなどもたくさん棲息していたが台風以後絶滅の状態になり、河川改修や、農業などの使用によって現在、ウナギの姿をみる事ができなくなってきた。富士川も昭和一七年五月に、波木井・塩之沢間に日本軽金属のえん堤が構築されたため天然アユなど



富 士 川 の コ イ

は激減している。甲斐国志に記されているように、数千百頭を一挙に捕るといふ昔日の姿を想像するだけでも楽しい富士川のアユである。近年は上流で放流したアユが初秋に川を下るぐらいのものである。淋しいアユの話である。コイは、毎年放流するので本町はコイの釣場として有名である。その他、ウグイ、フナ、ナマズ、スナモグリ、アブラハヤ、カジカ、オイカワ、ドジョウなどがある。

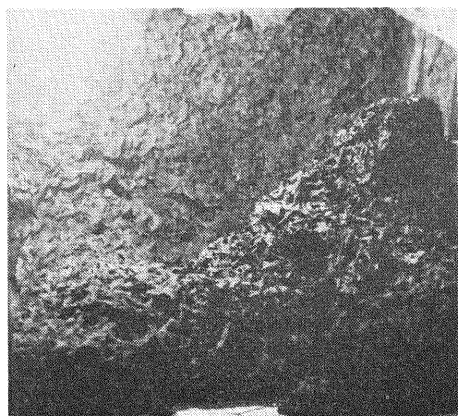
○サンショウウオ（山椒魚）

サンシヨウウオは両生類、サンシヨウウオ科に属する小型の種類
の総称であるが、オオサンシヨウウオを含めているということもあ
る。

山間地（本町では曙川の上流）の溪流に棲息し、世界で一四種が知られているが、そのうちヒダサンシヨウウオなど一三種までが日本特産である。体長はオオサンシヨウウオが一帀を越すほかは、すべて七一五^{がさい}ぐらいの小型である。未成熟の時は水中の酸素をとるための外鰓（えら）があり、成長すると肺により空気呼吸をするのがふつうである。ハコネサンシヨウウオのように肺がなく皮膚呼吸するものがある。産卵期は種類によって異なるが、冬・夏にバナナ状の卵房に数個はいった径約五^{がさい}の卵を右下などにうむ。本町のものは、ハコネサンシヨウウオの仲間である。

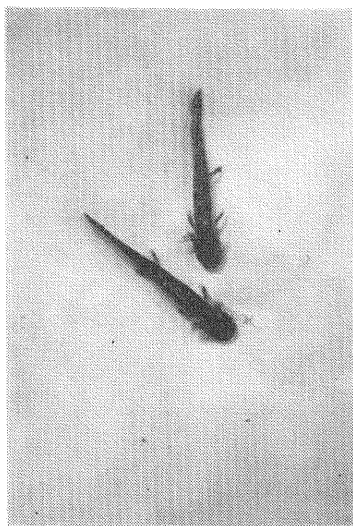
六
昆
虫
類

昆虫類は非常に種類が多いが本町で特筆するものとなれば、平須長遠寺の「蟻の塔」であろう。発見したのは昭和二五年ごろであ



蟻の塔（平須 長遠寺）

るが、日朝堂のシミ壇の下に蟻の巣が塔状になっていくつもならんでいる。蟻は、世界中に分布し、種類も多い、ハチに近縁な種類で形態も類似し、ともに顕著な社会集団をつくるので社会昆虫とよばれるが、日朝堂のシミ壇の下に蟻の巣が塔状になっていくつもならんでいる。蟻は、世界中に分布し、種類も多い、ハチに近縁な種類で形態も類似し、ともに顕著な社会集団をつくるので社会昆虫とよばれる



サンショウウオ

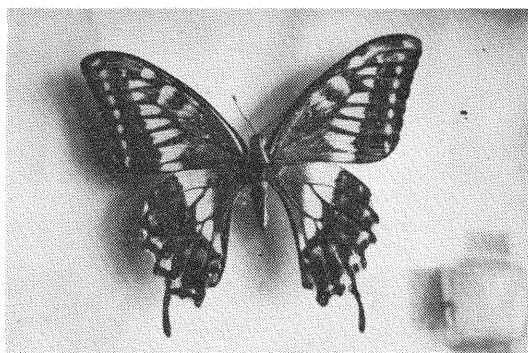
る。この蟻の塔はいくつかの集団が一如所に集まったものと考えられ珍しいものである。次に昆虫のおもなものをあげてみる。

(1) ハチの類

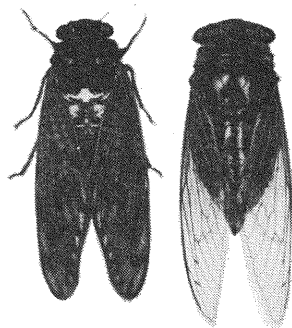
キアシナガバチ、ホソアシナガバチ、クロスズメバチ、スズメバチ（スズメバチ科）、ミツバチ、クマバチ、ハナバチ（ミツバチ科）、クロアナバチ、ジガネバチ（シガバチ科）などである。

(2) 蟬の類

蟬の種類はあまり多くなく、夏の夕暮れに、カナ、カナまたはヒグ、ヒグとなくヒグラシをはじめ黒い大型のクマゼミ、蟬のなかでは一ばん多



ア ゲ ハ チ ヨ ウ



セ ミ

くみかける ニー、ニーと鳴く、ニイニイゼミや、ツクツクホーシと鳴くツクツクボウシなどがあり、その他、アブラゼミ、ハルゼミ、ミンミンゼミ、エゾゼミなどが棲息している。

(3) 蝶の類

蝶類は種類が多く、七科九五種もが本町には繁殖している。おもなものをあげると次のようである。

- ・アゲハチョウ科 クロアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、アゲハチョウ、キアゲハ、モンキアゲハ、ギフチョウ。
- ・タテアチョウ科 コムラサキ、スミナガシ、ルリタテハ、ゴマダラチョウ、キタテハ、ミスジチョウ、コムスジ、ヒョウモンチョウ、クモガタヒョウモンなど。

- ・ジャノメチョウ科 ジャノメチョウ、ヒメジャノメ、コジノメ、キマダラヒカゲなど。

- ・シジミチョウ科 アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミドリシジミ、オナガシジミ、ゴマシジミ、シジミチョウ、ムラサキシジミなど。

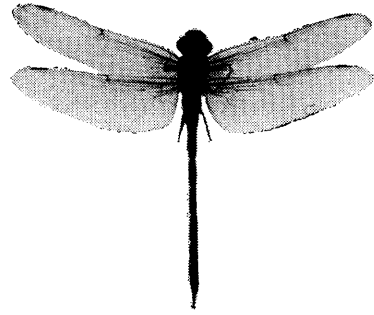
- ・シロチョウ科 ヤマキチョウ、モンシロチョウ、スジグロチョウ、ツマキチョウ、ツマグロキチョウ、モンキチョウなど。

- ・ヤマダラチョウ科 アザギマダラ。

- ・セセリチョウ科 ミヤマセセリ、ダイミョウセセリ、ヒメキマダラセセリ、クロセセリ、ホソバセセリ、アカセセリなど。

(4) トンボの類

ヤンマの仲間では、オニヤンマ、コシボソヤンマ、コオニヤンマなどで、トンボの仲間では、アキアカネ（赤トンボ）、シオカラト



マ　ン　ヤ

ンボ、ショウジョウトンボ、アオハダトンボ、ナツアカネなどである。

(5) カブト虫の類

カブトムシ、カナブン
アオカナブン、クロカナブン、シロテンハナムグリ、コガネムシ、ヒメコガネ（コガネムシ科）、ノコギリクワガタ、ミヤマクワガタ、アカアシクワガタ（クワガタ科）、

カブトムシ

コクゾウムシ、コフキゾウムシ、ヒメシロコクゾウムシ（ゾウムシ科）、コマダラカマキリ、シロシジカマキリ、ヤマカマキリ、キボシカマキリ（カミキリムシ

科）、オトシブミ、トロハマキチョッキリ（オトシブミ科）など、ほとんど害虫で農作物に被害をあたえている。

(6) バッタ、コウロギの類

ショウリョウバッタ、キチキチバッタ、カワラバッタ、イナゴ、

トノサマバッタ（バッタ科）、スズムシ、マツムシ、クサヒバリ、ミツカドコウロギ、エンマコウロギ、カナタタキ、オカメコウロギ（コウロギ科）、キリギリス、ウマオイムシ、カマキリ、コカマキリ、ハラビロカマキリ（カマキリ科）、ナナフシ（ナナフシ科）、ケラ（ケラ科）、チャバネゴキブリ、クロバネゴキブリ（ゴキブリ科）などである。近年農薬使用によって少なくなってきた。

(7) その他

○ホタル　ゲンジボタル、ヘイケボタル、オバボタルであるが農薬使用や、河川改修などによって激減している状態にあるのでなんとかホタルの繁殖ができるような対策をしなければならない。

○アリ　ムネアカオオアリ、トビイロケアリ、クロヤマアリ、クロオオアリ。

○その他　水辺にすむ、ゲンゴロウ、タガメ、アメンボ、ミズスマシ、ミズカマキリなどや、夏うるさく発生する、カ、アブ、カゲロウなどがの仲間や、ムカデなどで、くわしくは省略する。

参考文献

- 山梨県南巨摩郡の糸魚川―静岡構造線
- 山梨県地質誌
- 山梨県地質図編纂委員会
- 地質学雑誌（六三―七四七）
- 日本地質学会
- 甲斐の地質・富士をめぐる地質
- 小林 福造
- 山梨県の気象―気象七五年報
- 日本気象協会甲府支部
- 日本植物図鑑
- 牧野富太郎
- 山梨県の植物
- 植松 春雄

第三章 生 物

山梨県南部植物考
富士川流域の植物
世界原色百科事典
原色鉱石図鑑（シリーズ）
原色動物・昆虫図鑑

長沢 幸雄
植松 春雄
小 学 館
木下 亀城
保 育 社

